

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト

最終成果論文(2025 年度)

地域を題材とした探究学習が 生徒の地域への愛着に与える影響

経済学部 3 年 学籍番号：22308273

氏名：日下部結人

(指導教員：長田進教授)

目次

1.	はじめに	1
1.1.	研究目的・意義	1
1.2.	論文の構成	2
2.	先行研究等	4
2.1.	学習指導要領、先行研究における探究学習の位置づけ	4
2.2.	地域を題材とした探究学習の意義	8
2.3.	探究学習と地域への愛着の関連を示した先行研究	10
2.4.	地域への愛着と地域貢献の関連を示した先行研究	12
3.	調査対象の紹介	15
4.	生徒へのアンケート調査	18
4.1.	調査方法	18
4.2.	調査結果	19
4.2.1.	高校卒業後の地域からの移住意向	21
4.2.2.	愛着の尺度の測定	24
4.2.3.	Uターン意向	25
4.2.4.	探究学習の他の影響	29

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

5. 授業発案者へのインタビュー調査	37
5.1. 調査概要	37
5.2. 調査結果	38
5.2.1. 「探究飛驒」開始時の経緯	38
5.2.2. 地域との関係	40
5.2.3. 「探究飛驒」の現状について	42
6. 調査結果のまとめと考察	46
7. おわりに	50
謝辞	53
参考資料一覧	54
付表	59

1. はじめに

1.1. 研究目的・意義

現在の高等学校では、3年間で3～6単位を標準として¹、「総合的な探究の時間」の履修が必修化されている。この科目は、2018年に告示された学習指導要領において、「総合的な学習の時間」から改められ設置されたもので、特定の教科・科目等の幅を超えた総合的な学びが意識されている。自ら課題を設定し、情報を収集し、まとめ、発表するというプロセスが重視されており、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること（文部科学省, 2018b）」が目指されている。

この「総合的な探究の時間」の学習テーマは、学校ごとに決定するように定められている。様々なテーマに取り組む学校が存在する中、一定数の学校が取り組むのが、地域を題材とした探究学習である。

地域を題材とした探究学習を行う主な目的として、「地域への誇り・愛着を育てる」というものがある。さらに、このような誇りや愛着が、様々な形で将来的に地域に恩恵をもたらすことも期待されている。詳しくは、第2章において先行研究等から確認することとするが、このような期待は、探究学習の意義や理念として示されていることは多いものの、その実際の効果を検証している研究は少ない。また、地域を題材とした探究学習に着目している研究は、多数存在するものの、実際にその種の授業を担当している教員等によって記録された

¹ 文部科学省(2018a)では、「特に必要がある場合には、その単位数を2単位とすることができる。」とも述べられている。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

実践報告、事例報告的なものが多い。

本研究の目的は、授業を受ける側、行う側の双方の立場から、「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育て、生徒のUターン意向の上昇につながる」という仮説を検証することである。このプロセスを説明することができれば、教育が地域活性化の一助となる可能性を示すことができると考える。

なお、本研究では、将来の地域への恩恵の一例として、Uターンとの関係に注目する。少子高齢化が深刻な地方部において、若者が地元地域に戻ることは大きな意味を持つ。しかし、実際にUターンを行うか否かは、その時々 of 社会的要因、経済的要因に大きく左右されてしまう。そのため、本研究では、実際にUターンをしたか否かではなく、将来的にUターンをしたいか否かというUターン意向に着目をした。この意向が高まれば、社会的要因、経済的要因が優先されるものの、潜在的なUターン希望者数は一定数増加するものと考えられ、地域への恩恵があるといえることができる。このように、生徒の地域への誇り・愛着が育つと、地元地域へのUターン意向が上昇するという仮説について、検証を行っていくこととする。

1.2. 論文の構成

本研究では、上記で示した「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育て、生徒のUターン意向の上昇につながる」という仮説について、以下の2つの視点から調査と考察を行う。

1 点目は、地域を題材とした探究学習の当事者である生徒への調査である。協力をいただいた高等学校において、生徒に対してのアンケート調査を行い、実際に生徒の思考に変化があるのかを調査する。ここでは、ある程度のデータ数を集める必要性があった。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

2 点目は、このような学習の企画者である教師への調査である。同校で探究学習が開始された際の授業発案者に対してインタビュー調査を行い、地域を題材とした探究学習が、地域への愛着と関連付けて企画されたものなのかなど、当時の理念を尋ねた。さらに、前述のアンケート調査において明らかになった現状について、どのように考えているかを尋ねた。

よって、本論文では以下のような構成を取る。

まず第 2 章において、文部科学省が示す、総合的な探究の時間の学習指導要領、学習指導要領解説をもとに、この学習の意義や理念を確認する。また、「総合的な探究の時間」そのものの意義等についても確認しておく。その上で、このような探究学習と地域への愛着の関連を述べた研究について紹介する。その後、地域への愛着と U ターンなどの地域貢献の関連について、これまでの先行研究において述べられている通説を確認する。

続く第 3 章では、本研究において調査対象とした、私立高山西高等学校と同校で行われている探究学習である「探究飛騨」、並びに同校が位置する飛騨地域について紹介をする。

第 4 章では、1 つ目の視点として述べた生徒へのアンケート調査の結果とそこから考えられることを述べる。続く第 5 章では、2 つ目の視点として述べた教師へのインタビュー調査の結果とそこから考えられることを述べる。

第 6 章においては、第 4 章でまとめたアンケート調査の結果と、第 5 章でまとめたインタビュー調査の結果を踏まえ、考察を行う。最後に第 7 章において、本研究をまとめ、その課題と今後の展望について述べる。

2. 先行研究等

2.1. 学習指導要領、先行研究における探究学習の位置づけ

まずこの節では、本研究において取り上げた「総合的な探究の時間」そのものの位置づけについて、学習指導要領、および先行研究から確認する。

総合的な探究の時間とは、学校教育法施行規則において「高等学校の教育課程は、別表第三に定める各教科に属する科目、総合的な探究の時間及び特別活動によつて編成するものとする。（学校教育法施行規則第 83 条）」と定められていることから、高等学校で必修化されている授業である。高等学校においては、1999 年の学習指導要領改訂に伴い設置された「総合的な学習の時間」が起源であり、2009 年の改訂を経て、最新の 2018 年の改訂で現在の名称へと変更となった。

最新の 2018 年版の学習指導要領解説では、この名称変更の理由として、総合的な探究の時間の特質が、以下の 2 つの視点から解説されている。

1 点目は、「探究が高度化し、自律的に行われること」である。同書では、以下のように述べられている。

今回の改訂において名称を変更して特質をもたせたことには次のような背景がある。一つは、この時期の生徒が、人間としての在り方を理念的に希求し、それを将来の進路実現や社会の一員としての生き方の中に具現しようと求めていることである。二つは、小中学校の総合的な学習の時間における学びがこれらの特質の具体化を可能としていることである。そして三つは、この時間における学びが社会的に期待されているからである。（文

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

部科学省, 2018b)

2点目は、「他教科・科目における探究との違いを踏まえること」である。2018年の改訂では、古典探究や地理探究といった「探究」の名が付く他科目が多く新設された。これらの科目との違いについて、同書では、以下のように述べられている。

一つは、この時間の学習の対象や領域は、特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的な点である。総合的な探究の時間は、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象を対象としている。二つは、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点である。他の探究が、他教科・科目における理解をより深めることを目的に行われていることに対し、総合的な探究の時間では、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく。そして三つは、この時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。

（文部科学省, 2018b)

さらに、これら2つの特質と重なる部分が多いものの、同年の学習指導要領そのものでは、総合的な探究の時間の目標として、以下のように述べられている。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくた

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

めの資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

（文部科学省, 2018a）

ここまで示した、本授業が持つ2つの特質と本授業における目標をまとめると、総合的な探究の時間では、小中学校での総合的な学習の時間での取り組みの総仕上げとして、教科・科目等の枠を超え、各自のキャリア形成とも関連付けながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を養うことが目指されているといえる。これが、本授業に求められている根源的な目標である。

現に、総合的な探究の時間に関する研究においては、この目標に関連した内容のものが多い。

例えば、キャリア形成と関連付けた研究としては、まず掛本・中村(2023)が挙げられる。ここでは、高等学校教員に対するインタビュー調査を通じて、総合的な探究の時間が、これまでの出口指導的なキャリア教育からの脱却を目指し、個人に委ねられやすかったキャリア教育を、学校全体で取り組むものとして再構築する可能性があると述べている。小川(2025)では、一高等学校の総合的な探究の時間において行われているキャリア教育について、当該校の生徒へのア

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

ンケート調査を行い検証している。アンケート結果から、多くの生徒が、授業の前後でキャリア形成に対する自分の考え方が変わったと読み取ることができ、自身の考え方が他者からの意見を交えることによって深められているとして、その効果が伺える。

また、荒木・高橋・佐藤(2024)では、大学生に対し、キャリア探索との関連に着目してアンケート調査を行っており、探究型授業の経験とキャリア探索の関連を示唆している。また、この結果から、高校時代に探究型授業を経験し、自ら問いを立て、答えを導き出すために試行錯誤を行った経験は、大学以降のキャリア探索においても、自己理解に向けた試行錯誤に取り組む姿勢につながるのではないかと考察している。

さらに、「よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を養う」という点に着目してみれば、例えば前述した目標の(1)に示されている「課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け」る点について、藤村(2018)は、個別探究と共同探究を経ることで、多様な知識が関連付けられ、やがて再構造化されるとしている。

このように総合的な探究の時間の根源的な目標に着目している研究が多数存在する一方、それ以外の部分に着目している研究も多く存在する。例えば、地域との関連、高大連携などである。このうち、地域との関連については、本研究の主題となるため、次節以降で詳しく述べることとする。

根源的な目標以外に着目している具体例として、高大連携についての研究を挙げる。総合的な探究の時間に限った研究ではないものの、佐藤(2003)は、高大連携の背景や課題について述べており、高大連携の取り組みの重要性が増していくと結論付けている。その他、近年のものでは、清水・荒井(2023)が挙げられる。この研究では、大学の研究者が当該時間内でゼミ形式の授業を行うことにより、生徒に客観性の向上などの一定の効果を有する可能性を示唆している。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

なお、高大連携については、学習指導要領解説内でも複数箇所では触れられているものの、明確な目標の1つとはされていない。

総合的な探究の時間に関する先行研究は、他にも存在するものの、多いとはいええない状況であることにも触れておく必要がある。2018年の改訂以前に高等学校において行われていた総合的な学習の時間、現在小中学校で行われている総合的な学習の時間について触れている研究は、非常に多く存在する。例えば、下村・小山・白井・鷲尾・須曾野・落合(2005)や高橋・村山(2006)、加藤(2022)などが挙げられる。しかしながら、改訂後の高等学校の総合的な探究の時間についてのものは、実際に授業が実施されたのが2022年からと、未だ間もないことから、実際にその効果を検証している研究はほとんどなく、近年徐々に発表が行われ始めている段階である。また、各学校の教員等が記した実践報告的な研究が多いことも、本分野の研究の特徴である。例えば、寺西・木村・伊藤(2022)、笹尾・小林(2023)などが挙げられる。

2.2. 地域を題材とした探究学習の意義

前節では、総合的な探究の時間そのものの意義について、確認した。この節では、その中で本研究が着目する、地域を題材とした探究学習の意義について、総合的な探究の時間の学習指導要領、学習指導要領解説から確認する。前述した通り、2018年版の学習指導要領では、地域を題材とした探究学習により、生徒の地域への愛着や誇りを育てることが複数回にわたって述べられている。

学習指導要領によると、総合的な探究の時間の内容について、「各学校において定める目標及び内容については、地域や社会との関わりを重視すること。（文部科学省,2018a）」と定められている。一方、学習指導要領解説によると、目標を実現するにふさわしい探究課題として、「地域や学校の特色に応じた課題」に加え、国際理解、情報、環境、福祉、健康などの「現代的な諸課題に対応する

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

横断的・総合的な課題」、「生徒の興味・関心に基づく課題」、「職業や自己の進路に関する課題」が例として挙げられており（文部科学省, 2018b）、必ずしも地域を題材とする必要性は強調されていない。

この「地域や社会との関わりを重視する」が示す意味について、学習指導要領解説では、3つの視点から解説されている。1つ目は、実社会や実生活にある課題を取り上げることで、実社会や実生活で生きる資質・能力が育成できる点、2つ目は、身近な課題であるため、生徒が主体的に取り組みやすい点が挙げられている。そして、3つ目については、以下のように述べられている。

三つ目は、総合的な探究の時間では、生徒にとっての学ぶ意義や目的を明確にすることが重視されていることである。自ら課題を発見し、また解決する過程では、地域の様々な人との関わりが生じることも考えられる。そうした学習活動では、「自分の力で解決することができた」、「自分の取組が地域を動かした」、「これからも地域づくりに参画し、さらによい地域にしていきたい」、「自分たちは地域や社会の未来に対して責任があるし、それを果たしていくことは実にやりがいのあることだ」などの、課題の解決に取り組んだことへの自信や自尊感情、責任感が育まれ、地域や社会の一員であるとの意識も醸成されるとともに、自己の在り方生き方を深く省察するといったことが期待できる。（文部科学省, 2018b）

このように、学習指導要領においては、探究学習を地域と関連させることで、地域の人々との関わりから、地域の一員としての意識の醸成につながることを期待されていると確認できる。地域と関わるだけに留まらず、地域を題材として探究学習を進めることは、このような意識のさらなる醸成が期待できると考えられる。さらに、学習指導要領解説では、地域との関わりについて以下のよ

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

うに述べられている。

地域のもつ教育力を活用することは、この時間の目標をよりよく実現することにつながるだけでなく、更に次のような教育的効果をもたらす。一つは、学習活動を地域の中で行ったり、その成果を保護者も含めた地域の人々に公開することにより、生徒が社会の一員であることを再認識したり、生徒の学習意欲が向上したりすることになる。次には、学習活動を通して、生徒が地域の人々と親密になったり、地域の教育機関の利用に慣れたり、地域の自然や文化財等に関心をもったり、地域の伝統行事等に主体的に参加したりするようになり、生徒が地域への愛着を高め、豊かな生活を送ることにつながる。さらには、郷土を創る次世代の人材育成や持続可能な地域社会の形成にもつながるものと考えられる。（文部科学省, 2018b）

引用部前半については、前述した3つの視点と一致する部分が多い。一方、引用部後半では、生徒が授業外でも様々な形で地域との関わりを強め、これが地域への愛着、さらには将来的な地域の形成にもつながると述べられている。ここで述べられている「郷土を創る次世代の人材育成」とは、Uターンも含め、将来地域で活躍する若者を育成するという意味だと理解される。これらを総合すると、本研究の仮説として示した「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育て、生徒のUターン意向の上昇につながる」ことは、1つの意義として期待されていることを確認できた。

2.3. 探究学習と地域への愛着の関連を示した先行研究

探究学習と地域への愛着の関連については、他の研究内でも多数取り上げられている。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

高大連携による地域のまちづくりを題材とした探究学習の成果や課題を整理し、高大連携の可能性と期待される事項について考察している渡邊(2022)では、探究学習をきっかけとし、生徒が地域への愛着を高め、地域の人々と近くなる、地域の自然や文化などに関心を持つ、地域の伝統行事等に主体的に参加することで、地域への理解を深め、愛着や誇りを持つのに、大きな影響を与えると述べている。また、山口(2024)は、小学生を調査対象としているが、体験活動や人々との関わりを通して、地域のことを知り、好きという気持ちになり、自分ごととして考えることが、地域への愛着と結びつく位置付けている。さらに、倉岡(2020)では、総合的な探究の時間における地域での世代間交流に着目し、地域協働の取り組みが、社会参画の意欲や効果に直接影響を与えるかについての説明は不十分と断った上で、社会参画の意欲や効力感は、総合的な探究の時間を地域と協働して進めることで醸成することが可能であると結論付けている。

他にも、佐々木・中沢・友淵(2024)は、地域での学びが重視される背景として、学生が地域に関わることで、いずれは地域の担い手となることへの期待があり、それが目的の1つであると指摘している。橋本・山下(2022)でも、総合的な学習の時間における「ふるさと学習」が、子どもたちが自分の住む地域に愛着を持ち、将来の地域の担い手になるために、地域再生を課題とする各自治体によって展開されていると述べられている。なお、ここで述べられている「総合的な学習の時間」は、前述したように小中学校で設置されている授業であり、その内容は本研究の対象である総合的な探究の時間と極めて近いものである。

一方、仮説で示した内容については、各論文内で研究の前提や考察として述べられていることが多く、数値を用いて客観的・定量的に示しているものは管見の限りない。前述の渡邊(2022)では生徒へのアンケート調査が行われているものの、生徒自身に関心が高まったかを直接尋ねており、客観的な結果である

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

とは言い難い。倉岡(2020)についてもアンケート調査を行っているものの、横浜市という比較的都市部をフィールドとした調査であること、世代間交流に着目していることから、地域活性化に焦点を当てているとは言い難い。また、渡辺・森川(2023)は、地域と協働した探究学習による生徒の意識の変化を、既存のアンケート結果より分析しているが、学力層による成長実感の違いに着目しており、地域への愛着への言及は不十分である。

加えて、地域を題材とした探究学習について述べている他の論文については、総合的な探究の時間に着目した他の研究と同様、指導にあたっている教師による事例報告に留まるものが多いことも特徴である。具体的には、横山(2016)、大塚(2019)などが挙げられる。また、教師ではないものの、探究学習のサポートを行う立場から書かれている長田(2021)は、本研究で調査を行った私立高山西高等学校の「探究飛騨」の事例を述べている。

2.4. 地域への愛着と地域貢献の関連を示した先行研究

第2節、第3節では、地域を題材とした探究学習について、学習指導要領や先行研究において、どのように述べられているのかを示した。本節では、本研究の仮説の後半部分である、地域への愛着とUターンなどの地域貢献の関連について、先行研究から確認することとする。

本研究では、Uターン意向に着目しているが、地域への愛着とUターン意向の関連を示している論文は数多く存在する。江口(2002)では、島根県の高校生への意識調査から、Uターン意識について、地域愛着意識が大きな影響を与え、その中でも中年期ごろから現住地での居住志向が高まることを示している。西村・南條(2017)は、島田市において高校生を対象としたアンケート調査を行い、地域を好きだと感じる度合いが高いほど、定住意欲が高まる可能性があること、その視点を重視して政策や事業を企画することが望ましいことを述べている。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

北山(2021)では、いくつかの先行研究を挙げたうえで、高校生を対象に地域への愛着と U ターン意識の関係を調査し、愛着度が高ければ地域志向度も高く、愛着度が低ければ地域志向度も低いという、先行研究と一致する関連性を確認している。また、杉山(2012)も、北海道の国立大学大学生を対象としたアンケート調査より、地元への愛着が地元志向度を高めることを示している。しかし、この研究では、地元への貢献意識が十分に確立されていないことを指摘しており、地域活性化につなげるためには、この意識を伸ばす必要があるとも述べている。

U ターン意向がどのように形成されるのかについて言及している論文も複数存在する。

その中でも、岡崎・後藤・山崎(2004)や、片岡(2002)では、家族の存在に着目している。前者は、U ターン者を対象に転入要因と時期の変遷について調査を行っており、転入要因は「家族・親戚がいる」が最多であったと示している。後者は、島根県の高中生への意識調査を通じ、縦のつながりや秩序を重視するという家族意識が高校生の定住志向に結び付くことを示しており、そのような家族意識は、自分自身が地域社会で活躍できるという目標や期待、自信の結果であると考察している。

一方、齋藤・佐藤(2019)や塩見(2023)は、教育を含めた幼少期からの環境に着目している。前者は、奄美の島集落において若年層の U ターン者を対象とした調査を行い、子供の頃の回帰意向の形成が、将来の U ターン者を増加させる要因になり得ると述べている。また、後者は、地方出身で東京圏に進学した若者を対象にインターネットでのアンケート調査を行い、「地元の地域課題を知る授業は良い経験だった」と回答した人に U ターン実行者が多いことを示し、高校での地域課題学習が U ターンの意識形成に影響を与えている可能性を示している。これらの研究からは、教育という幼少期からの環境が U ターンに繋が

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

というプロセスが、先行研究によって示されていることを確認することができた。

3. 調査対象の紹介

本章では、第4章のアンケート調査、第5章のインタビュー調査の対象とした、私立高山西高等学校、同校で行われている「探究飛驒」と呼ばれる探究学習、および同校が位置している飛驒地域について紹介する。

高山西高等学校は、岐阜県高山市に所在する私立の高等学校である。同校では、2014年度から、高校2年時に、特進Ⅰクラスの2クラス、特進Ⅱクラスの1クラスの計3クラスを対象に²、地元である飛驒地域を題材とした探究学習、「探究飛驒」が実施されている。本授業は、実施対象クラスに所属する生徒は必修として履修が義務付けられた授業であり、生徒の自由意思によって履修が決まっているものではない。

表1は、その年間スケジュールをまとめたものである。

本学習は、高校1年次の2月に、テーマを考えることから開始する。3月に行われる、1学年上級生の発表会で探究へのイメージを高めた後、6月頃には探究のテーマを確定させる。その後、8月から11月にかけて、文献調査、アンケート調査、インタビュー調査等の情報収集とその分析を行う。11月頃からは、翌年3月に行われる発表会に向けたスライドの作成や、論文執筆を行う。このように、本学習は、地元である飛驒地域を題材としたテーマを生徒が自ら設定し、情報収集、分析、発表を行うというプロセスを踏む探究学習である。

² 同校の学校ホームページによれば、特進Ⅰクラスは「3年間学習に専念し、国公立大学・医歯薬系大学・難関私立大学進学を目指」すクラス、特進Ⅱクラスは「部活動と学習を両立し、幅広い進路に対応したカリキュラムで、大学・短大・専門学校への進学、就職や公務員を目指」すクラスとされている。「探究飛驒」には、特進Ⅰクラスの全クラスと、特進Ⅱクラスのうち最も学力が高い1クラスが参加している。

表 1 「探究飛驒」の1年間のスケジュール

実施時期		実施内容
高校1年	2月	顔合わせ・探究テーマの設定を始める
	3月	上級生の発表会の補助
高校2年	6月	探究テーマの確定
	8月	調査(情報収集等)
	9月	調査(情報収集等)
	11月	調査等・まとめの開始(発表会スライドの作成・論文執筆等)
	1月	まとめ(発表会スライドの作成・論文執筆等)
	2月	まとめ(発表会スライドの作成・論文執筆等)
	3月	発表会

また、授業は毎週の時間割上で固定されて設置されるのではなく、2カ月に1回程度、「探究飛驒の日」を2日間設けて行われる。この2日間は、外部の大学教員や大学生、卒業生らが同校を訪れ、探究学習をサポートする形を取っている。特に、8月、9月、2月には、多くの大学生が訪れ、高大連携の場にもなっている。

なお、前述したように、本授業については、探究学習をサポートする立場として、長田(2021)で詳細に述べられている。

同校が所在する岐阜県飛驒地域の進学環境についても簡単に説明をしておくこととする。岐阜県の北部に位置する飛驒地域には、2025年現在、4年制大学が存在しない³。そのため、高校卒業後、大学進学をすることは、地域を離れることと同義である。転出先は、名古屋、富山をはじめ、首都圏、関西圏も含め

³ 2026年4月に、岐阜県飛驒市に Co-Innovation University（略称 CoIU）が開学予定である。開学すれば、飛驒地域で唯一の4年制大学が誕生することとなる。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

て多岐にわたる。すなわち、卒業生の U ターンが無ければ、地元の人材は定期的に流出し続けることとなる。さらに、このことは、本人が地域を離れることはもちろんのこと、地域に大学生の存在がないことも示している。そのため、大学生との交流は、進路選択に影響を与える可能性がある。

4. 生徒へのアンケート調査

4.1. 調査方法

地域を題材とした探究学習が生徒に与える影響を調査するため、前述した「探究飛騨」を行う前後の高校生を対象として、アンケート調査を行った。調査は、2025年8月3日、8月4日、9月17日、9月18日の計4日間にわたって、同校において Google フォームを用いて行った。

本研究では、この学習を来年度経験する予定となる高校1年生、現在取り組んでいる最中である高校2年生、昨年度経験した高校3年生に調査を行うことで、地域を題材とした探究学習による生徒の地域への愛着の変化、Uターン意向の変化、探究学習への思いの変化を明らかにすることを目指した。

質問項目の一覧については、本研究の末尾に付表として示した。質問は大きく分けて以下の3種類である。

1つ目は、地域への愛着、Uターン意向について尋ねる質問である。前述した「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育て、生徒のUターン意向の上昇につながる」という仮説について調査するために最も重要な質問群である。

2つ目は、生徒の属性を確認する質問である。仮説を明らかにするうえで、地域への居住年数をはじめとした個人の属性が、地域への愛着やUターン意向に影響を与える可能性がある。これを確認するために、調査冒頭で尋ねた。

3つ目は、「探究飛騨」について尋ねる質問である。本授業は、地域を題材としていることに加えて、いわゆる座学ではないなど、探究学習そのものの特徴を有している。「探究飛騨」のどのような点が、生徒たちにとってポジティブま

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

たはネガティブに感じられていたのかを明らかにするための質問群である。

4.2. 調査結果

有効回答者数は 163 名であった。このうち、1 年生は 53 名、2 年生は 60 名、3 年生は 50 名である。

各学年ごとの性別、飛騨地域への居住年数、家族形態、より詳細な居住地域といった属性の内訳について、表 2 に示した。回答者のうち、男子は 74 名、女子は 89 名であり、大きな偏りはみられなかった。また、各学年ごとにみても、3 年生のみ男子が女子を上回るものの大きな偏りとはいえない。飛騨地域への居住年数、家族形態、居住地域についても、各学年ごとに大きな偏りはみられなかった。

表 2 アンケート調査対象とした生徒の各学年ごとの属性

		1 年生	2 年生	3 年生	合計
性別	男	23	24	27	74
	女	30	36	23	89
飛騨地域 への居住	生まれてから居住している	42	42	39	123
	転居（～小学校入学）	7	9	5	21
	転居（小学校入学～卒業）	0	1	4	5
	転居（中学校入学～卒業）	1	1	0	2
	転居（高校入学時）	3	7	2	12
家族形態	親と祖父母と同居	14	12	9	35
	飛騨出身の親 ⁴ と同居	31	38	34	103
	飛騨以外出身の親と同居	6	2	5	13
	1 人暮らし	2	8	2	12
居住地域	高山市内	39	47	38	124
	下呂市内	9	5	5	19
	飛騨市内	5	8	7	20
合計		53	60	50	163

高校卒業後の進路については、99.4%（160 名）の生徒が大学、専門学校、大学校への進学を予定していた。その他、1.2%（2 名）が就職予定、0.6%（1 名）が決めていないとの回答を得られた。

⁴ 両親のいずれかが飛騨出身であれば、この項目を満たすこととした。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

ここからは、前節で構成を述べた生徒の属性を確認する質問、地域への愛着、Uターン意向について尋ねる質問、探究飛驒について尋ねる質問のそれぞれについての結果、考察と、その関連について述べることとする。

4.2.1. 高校卒業後の地域からの移住意向

図 1 は、高校卒業後に飛驒を離れる予定があるかという質問に対する回答結果を各学年ごとにまとめたものである。

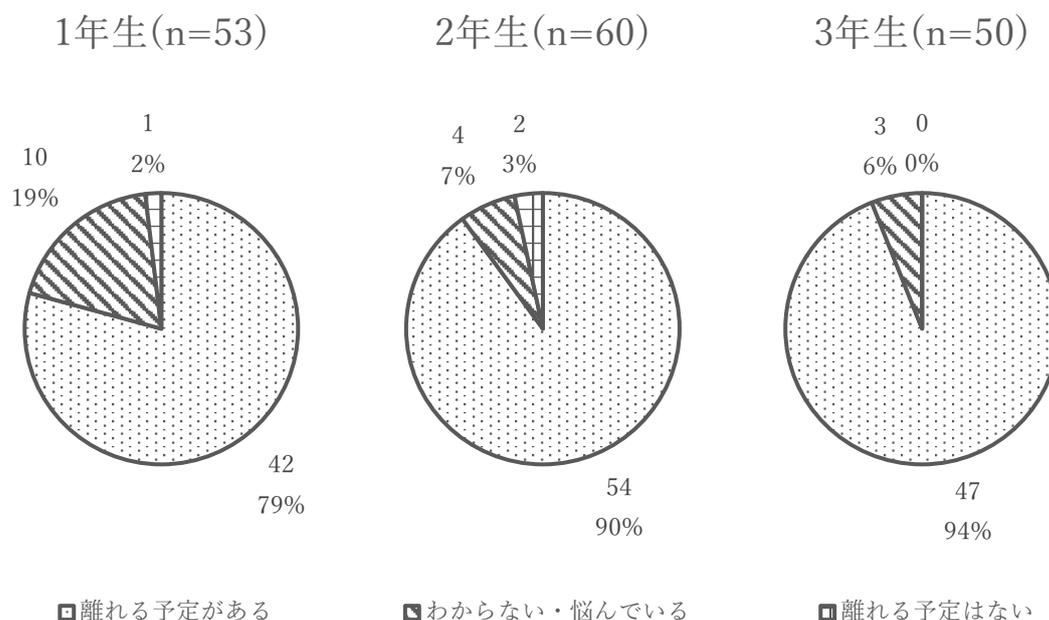


図 1 高校卒業後に飛驒地域を離れる予定があるかについての各学年ごとの回答結果

3 学年を比較すると、1 年生が「わからない・悩んでいる」と回答した割合が多かった。高校卒業までまだ多くの時間があるため、この回答は自然なものだといえる。また、離れる予定があると回答した割合は、最も低い 1 年生でも 79% であり、全体的に高い割合を示していた。詳しくは後述するが、4 年制大学がないという飛驒地域の特徴ゆえの傾向だと考えられる。

地域を離れる理由

飛驒地域を「離れる予定がある」と回答した 143 名について、地域を離れる理由の内訳を図 2 に示した。また、飛驒地域を離れるか否かについて「わからない・悩んでいる」と回答した 17 名の、離れる選択肢を消せない理由の内訳を

図 3 に示した。

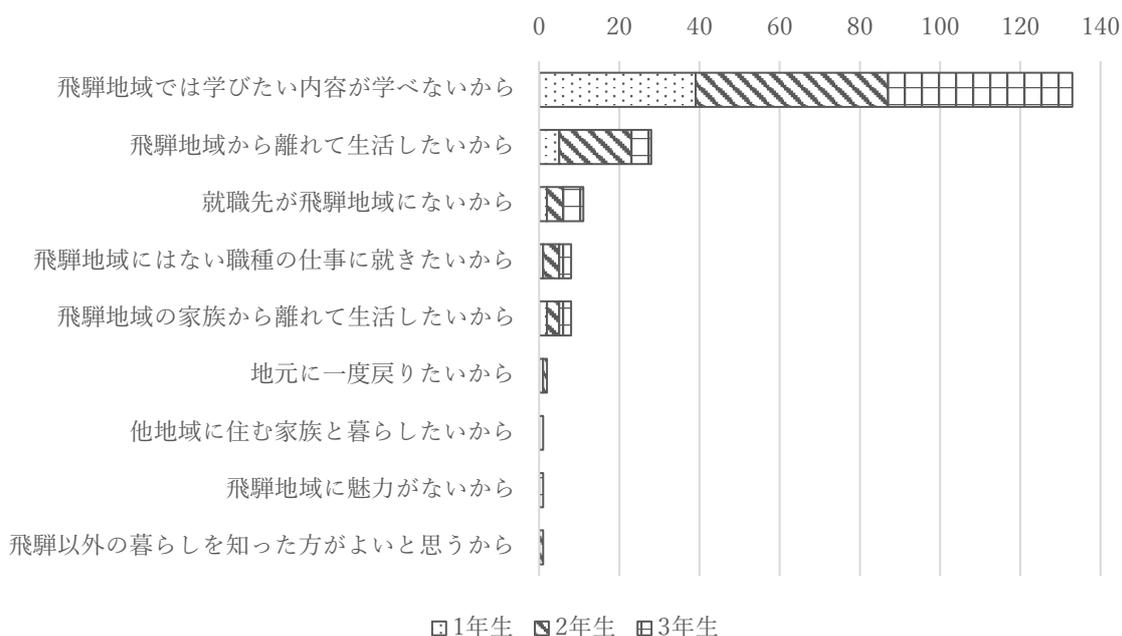


図 2 飛騨地域を離れる理由（離れる予定があると回答した生徒向け）

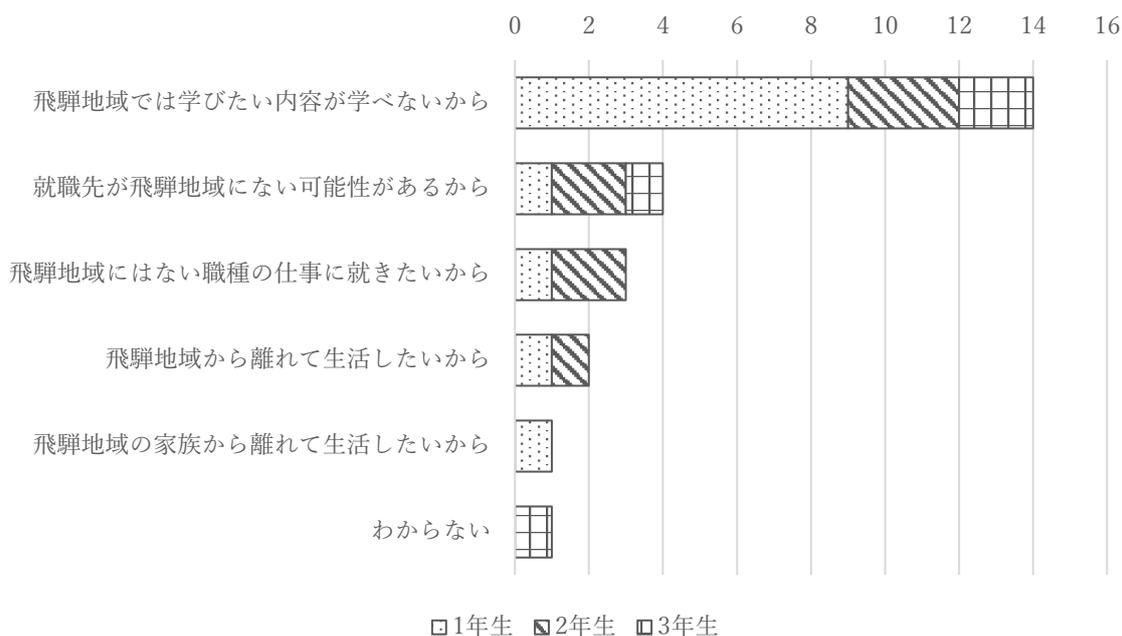


図 3 飛騨地域を離れる選択肢を消せない理由（わからない等と回答した生徒向け）

「離れる予定がある」とした 143 名のうち、93%にあたる 133 名が「飛騨地域では学びたい内容が学べないから」という進学上の理由を選んでいた。また、「わからない・悩んでいる」とした 17 名のうち、82.4%にあたる 14 名が、進学上の理由を示す同様の選択肢を選んでいる。前述のとおり、調査時点では飛騨

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

地域には4年制大学が存在せず、大学進学のためには地域からの移住が必ず伴う。そのため、極めて必然的な結果であると考えられる。

「離れる予定がある」と回答した人のうち、次に多い理由は「飛騨地域から離れて生活したいから」であった（19.6%・28名）。一方、「わからない・悩んでいる」と回答した人のうち、次に多い理由は「就職先が飛騨地域にない可能性があるから」であった（23.5%・4名）。また、次点は「飛騨地域にはない職種の仕事に就きたいから」であり（17.6%・3名）、こちらも就職関連の理由である。

このように「離れる予定がある」と答えた人は、地域から離れたいという回答が多く、「わからない・悩んでいる」と答えた人は、就職関連の回答が多かった。このような結果の違いは、地域を離れる意志の強さに関連していると考えられる。「離れる予定がある」と回答した人は、地域を離れる意思がある程度強いと考えられる。このような人々は、地域からとにかく離れたいという意思を持っている場合が多いと言え、これは地域への漠然とした負のイメージを持っていることを示しているといえるだろう。一方、「わからない・悩んでいる」と回答した人は、このような人々に比べ、地域を離れようとする意志は弱いといえる。地域からとにかく離れたいという感情を持つ人は少ないものの、将来的な就職の悩みという現実的な問題が、地方である飛騨地域に残るとは言い切れない理由につながっていると考えられる。

地域に残る理由

飛騨地域から「離れる意向はない」とした3名のうち、1名が「家族が好きで離れたくないという思いがあるため」という家族関連の理由を選んでいった。なお、残りの2名は未回答であり、他の選択肢は選ばれなかった。一方、飛騨地域を離れるか否か「わからない・悩んでいる」と回答した17名のうち、留まる選択肢を消せない最も多い理由は、「地域に貢献したい気持ちがあるため」で

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）あり（64.7%・11名）、「家族が好きで離れたくないという思いがあるため」という家族関連の理由が次点であった（35.3%・6名）。これらの結果を総合すると、家族への愛着と地域への貢献意欲が、地域に残る意向を持つ理由、また残る選択肢を消せない理由として大きいものであるとわかる。

4.2.2. 愛着の尺度の測定

地域を題材とした探究学習の実施前後による愛着の大きさの変化

地域への愛着の大きさを数値化するため、5つの指標を用意し、それぞれについて「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない」の5つの選択肢から選択してもらった。「強くそう思う」を4、「ややそう思う」を3、「ややそう思わない」を2、「全くそう思わない」を1として、5つの指標の平均値を求め、その個人の地域への愛着の大きさを数値化したもの（以下、愛着度とする。）とした。「わからない」を選択した場合は、それ以外の指標の平均値で代替している。すなわち、愛着度は4点満点の指標となる。5つの指標については、引地・青木・大淵(2009)において用いられている、定住意向、地域への所属意識、土地の重要さ、地域住民の重要さ、住みやすさの5つの項目を用いた。

この結果、1年生の平均値は3.322、2年生の平均値は3.050、3年生の平均値は3.116であり、1年時が最も高く、2年時が最も低くなっていた。

今回の調査においては、1年生を探究学習実施前、2年生を探究学習実施中、3年生を探究学習実施後の生徒とし、その変化に着目している。1年生が最も愛着度が大きく、2年生が最も小さいという上記の結果から考えれば、地域を題材とした探究学習の実施によって地域への愛着が強まるということはいえない。

愛着の大小の決定要因

では、どのような理由によって愛着度、すなわち地域への愛着の大小が決定するのだろうか。この解明のため、被説明変数を愛着度、説明変数をアンケート

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

ト調査により収集した様々な属性をもとにしたダミー変数とし、それぞれについて最小二乗法で単回帰分析を行った。なお、サンプルサイズは、愛着度を計る質問への回答がすべて未回答であった1名分を除く、162である。

ここで有意となった説明変数が、小学校卒業時点での居住を示すダミー変数である。係数は0.3264とプラスであり、標準誤差は0.1501であった。p値は0.0312であり、5%有意水準で有意である。地域に住んでいる時間がある程度長いほど、地域への愛着は強まる可能性が高いと考えられるため、この変数の係数がプラスとなった今回の結果は、想定される結果と一致しているといえるだろう。小学校卒業以前からという、ある程度長い年数を地域で過ごすことが、地域への愛着を強めることが確認できた。

一方、性別、家族形態、飛騨地域の中でのより詳細な居住地域など、属性を表した他の変数との相関はみられなかった。

4.2.3. Uターン意向

「離れる予定がある」、「わからない・悩んでいる」と回答した計160名に対し、高校卒業後に飛騨地域を離れたとした場合、将来的に飛騨地域にUターンする意向があるかを尋ねた。結果は、図4の通りである。

1年生から3年生までを比較すると、2年生が、「可能な限り早く飛騨に戻ってきたい」、「しばらく飛騨以外の場所で生活した後、いずれ飛騨に戻りたい」のようなUターン意向を示す選択肢の回答が少なく、「飛騨に戻る意向はない」と断言した人数が最も多かった。また、前述した高校卒業後の飛騨からの移住意向では、1年生が他の学年の生徒と比べて「わからない・悩んでいる」と回答した人が少なかったが、本設問では、「現時点ではわからない」と答えた割合は、学年によってほとんど変わらなかった。2年生のみ、他学年とやや異なる結果が示されているが、1年生から3年生まで段階的に変化しているものではなく、愛着度と同様、探究学習によって変化するということはできない。

各学年ごとのUターン意向の割合

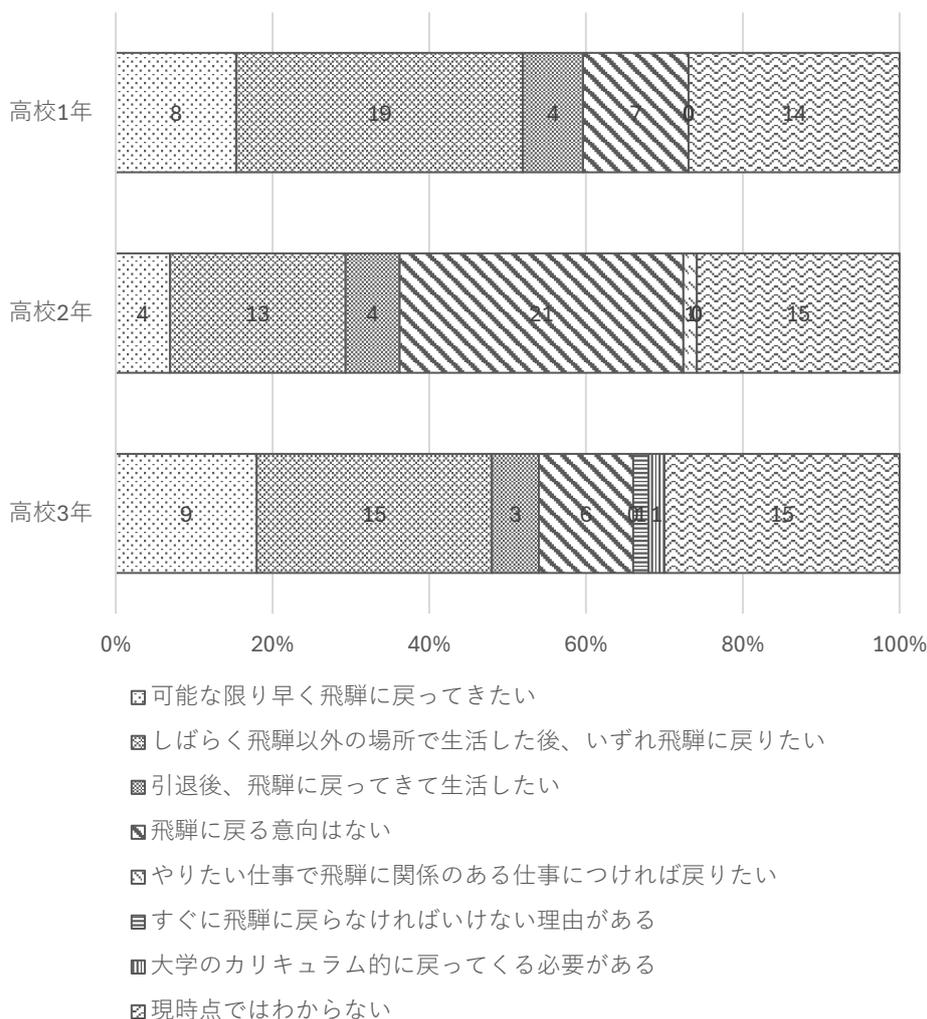


図 4 Uターン意向の各学年ごとの割合

愛着度との関連

ここでは、江口(2002)などの先行研究等でも説明されている、地域への愛着がUターン意向につながることを、今回のアンケート結果から定量的に説明することとする。

積極的なUターン意向を持つ人を1、持たない人を0としたダミー変数を被説明変数、各生徒の愛着度を説明変数として、ロジスティック回帰分析を行った。ここでは、「可能な限り早く飛驒に戻ってきたい」、「しばらく飛驒以外の場所で生活した後、いずれ飛驒に戻りたい」、「引退後、飛驒に戻ってきて生活し

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

たい」といった、自主的に飛驒に戻る意向を持つ人を、積極的な U ターン意向を持つ人とした。一方、「飛驒に戻る意向はない」と答えた人に加え、「すぐに飛驒に戻らなければいけない理由がある」、「大学のカリキュラム的に戻ってくる必要がある」などの自主的とは言えない理由で飛驒に戻る人、「現時点ではわからない」と回答した戻りたいとは言い切れない人を積極的な U ターン意向を持たない人とした。

結果、この分析は 1%有意水準で有意な結果となった。係数は 1.8974 とプラスであり、標準誤差は 0.3929、p 値は 0.001 未満であった。すなわち、地域への U ターン意向を高めるために、地域への愛着を高めようとすることは意義のある施策であり、地域活性化のための一手段として有効であると考えられる。

U ターン意向を持つ理由

次に、そのような U ターン意向はどのような理由によって形成されるのかについて、より詳細な検証を行う。

被説明変数は前述したダミー変数とし、説明変数を U ターン意向を持つ要因として考えられる理由について 4 尺度で計った変数として、再度ロジスティック回帰分析を行った。前節でも述べたが、「家族と一緒にいたい」という家族関連の理由、「地域に就きたい職がある」という就職関連の理由、「地域に貢献したい」という貢献意欲からの理由、「地域に対して良いイメージがある」という漠然とした意識からの理由のそれぞれについて、分析した。

結果は、表 3 の通りである。なお、すべて 1%有意水準で有意であり、すべての変数が U ターン意向と正の相関を示すと考えられるため、想定される符号とも一致している。

表 3 Uターン意向の形成理由の分析結果⁵

	係数	標準誤差
家族と一緒にいたい	1.084***	0.307
地域に就きたい職がある	0.973***	0.236
地域に対して良いイメージがある	0.956***	0.282
地域に貢献したい	0.918***	0.239

係数が大きい順に、家族関連、就職関連、漠然とした意識、貢献意欲となった。地域に留まる理由として、家族が1つの大きな理由となっていたことは前述したが、ここでも家族が地域に住む理由として強い影響を持つことが判明した。これは、前述した先行研究等とも一致している。一方、「地域に対して良いイメージがある」や「地域に貢献したい」という理由は係数が低い、すなわち理由としては弱いものであった。

このような地域への思いを表した理由が、Uターン意向に対してポジティブな影響を持つこと自体は、評価すべきことである。しかしながら、家族や仕事といった現実的かつ具体的な理由に比べれば、これらの理由は抽象的であり、Uターンをするという人生における大きな出来事に結びつく結論付けるには、難易度が高いことが明らかになった。

このことから考えれば、自治体として、このような地域への思いをUターン意向に繋げるための政策が必要であると考えられる。すなわち、この地域に戻れば自分のスキルや志向をこのように活かすことができる、このように地域に貢献できるというように、人々が、Uターンを行った際の具体的なイメージを掴むことができる仕組みづくりが必要である。Uターンを考える人々に対して具体的な役割や活動の手段を明示し、地域への思いを現実的かつ具体的な計画

⁵ *p<0.1、**p<0.05、***p<0.01

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

に落とし込むための情報提供や機会の創出が、不可欠であるといえる。

なお、前述したように地域への愛着が地域への U ターン意向に結び付くとは言えど、重要な役割を担っているのは家族や仕事の存在であり、必ずしもその地域でなくともよい可能性が考えられる。この点については、今後の研究でより詳細に検討する必要がある。

4.2.4. 探究学習の他の影響

前項までの結果より、地域を題材とした探究学習によって、地域への愛着や U ターン意向に強い影響を与えると結論付けることはできなかった。本項では、このような探究学習が、生徒たちにとって、どのように感じられていたのか、そしてどのような影響を与えたのかを考えることとする。探究飛騨について、「楽しみ」や「楽しかった」などポジティブに感じている部分と、不安や後悔などネガティブに感じている部分を尋ねた。一部文体に差があるものの、選択肢の内容は 1 年生から 3 年生まで同様である。

ポジティブな意見

1 年生の楽しみという意見、2 年生の楽しいという意見、3 年生の楽しかった、ためになったなどの肯定的に感じている意見をまとめ、ポジティブな意見とした。図 5、図 6、図 7 は、その結果をまとめたものである。

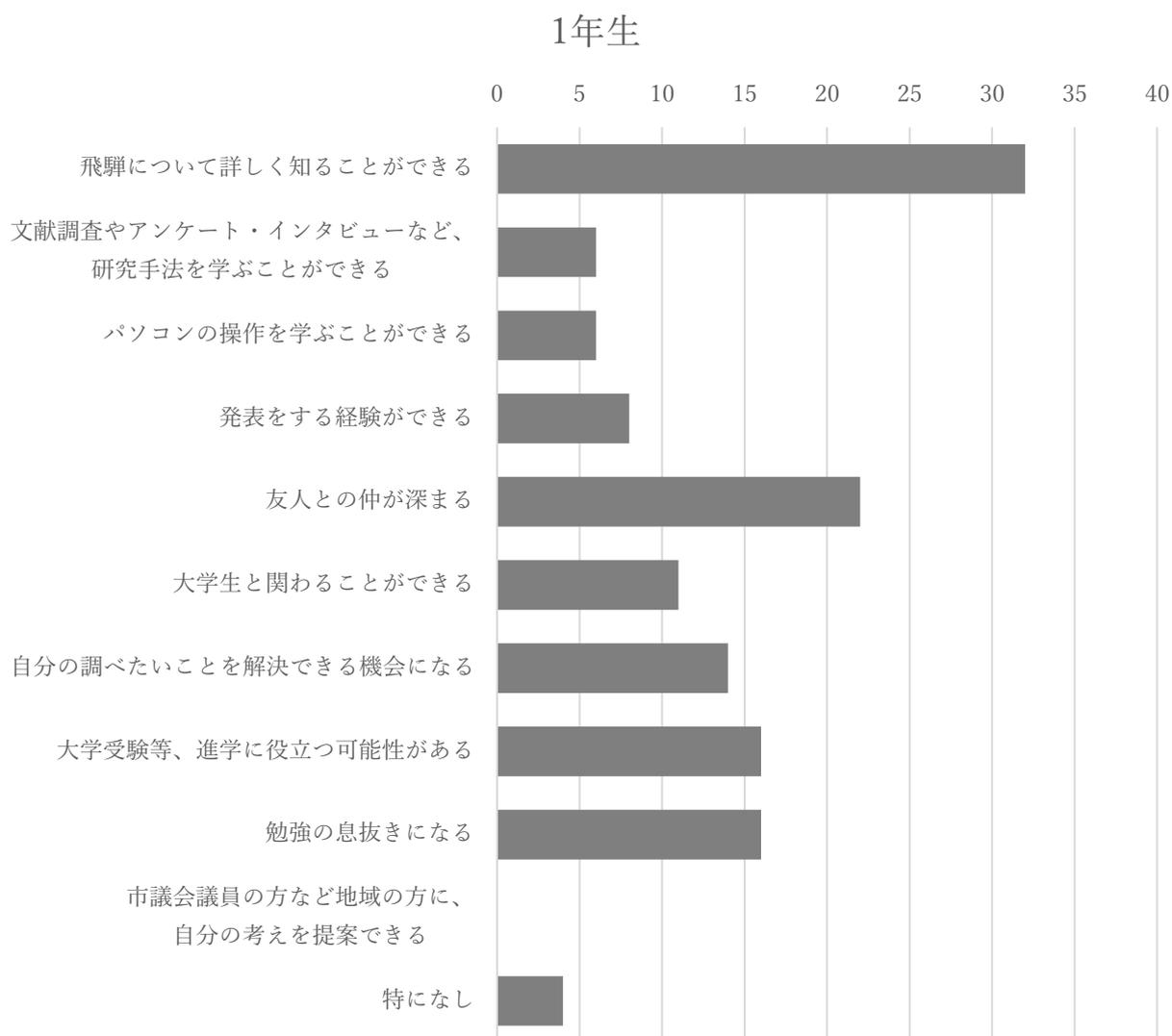


図 5 1年生が「探究飛騨」に対して感じているポジティブな意見

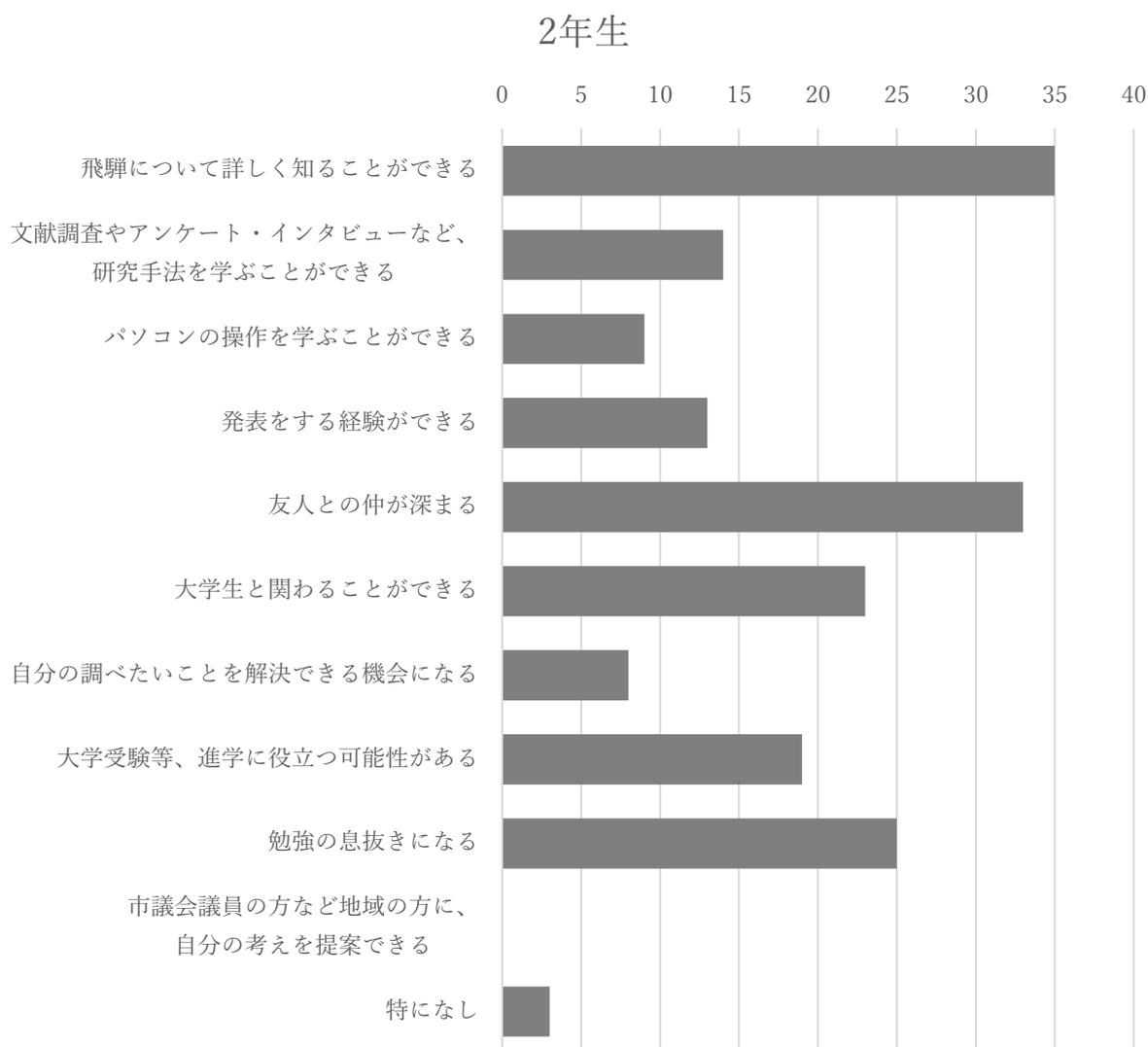


図 6 2年生が「探究飛騨」に対して感じているポジティブな意見

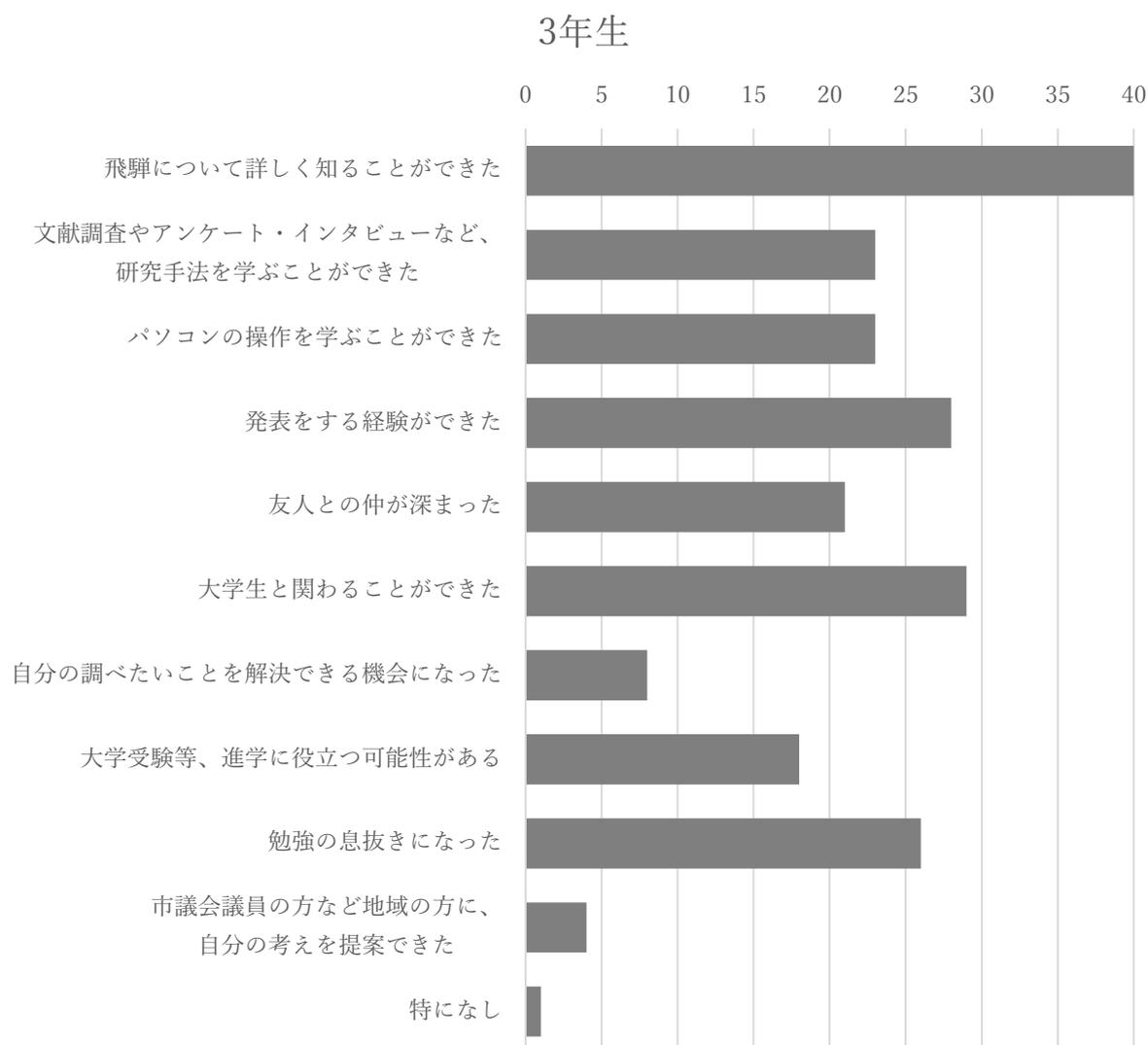


図 7 3年生が「探究飛騨」に対して感じているポジティブな意見

全学年において、最も多かった意見が「飛騨について詳しく知ることが出来る」という点である。やはり、「探究飛騨」という名前が付けられている授業であることから、生徒が最も期待する点であり、最も印象に残った点であったと読み取れる。

一方、2番目に多い選択肢は、学年によって異なった。

図 5 に示した 1 年生の結果によれば、「飛騨について詳しく知ることが出来る」の次に多かった意見は、「友人との仲が深まる」であった。1 年生は、まだこのような探究型の授業を受けたことが無く、他科目ではやはり座学型の授業

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

が多い。そのような中で、友人と話し合いながら進めていく本学習は、友人と共に学ぶ数少ない機会として、期待が大きいものであると思われる。また、図 6 に示した 2 年生の結果においても、この意見が 2 番目に多かった。そのような 1 年生の状況から、2 年生に進級し、実際に探究学習を体感した後も、友人と共に学習を進められることを楽しいと感じていることが伺える。

しかしながら、図 7 に示した 3 年生の結果によれば、「友人との仲が深まった」は 5 番目に多い意見となっている。2 番目に多い意見となったのは、「大学生と関わることができる」であった。前述したように、「探究飛驒」では、大学生、卒業生をはじめとしたメンバーが、探究学習のサポートを行っている。その際、探究学習そのものの内容からは一部逸れるものの、大学での生活についてや大学受験のアドバイスなど、大学生と高校生の一交流の機会となっている。前述したように、2025 年現在、飛驒地域には 4 年制大学が存在せず、兄弟等を除いて、大学生と関わる機会がない、または少ない。高校 3 年生となり、大学進学が近づくとつれ、このような機会を貴重であったと振り返る傾向が強いと考えられる。

一方、1 年生、2 年生においては、「大学生と関わるができる」の選択肢は、それぞれ 6 番目、4 番目に留まっていた。1 年生は、未だ大学生との交流の機会はなく、そのメリットを理解していない可能性が高い。また、2 年生についても、特に 8 月にアンケートに答えた生徒は、大学生と関わった機会がまだ少なく、このようなメリットを感じられる機会そのものが少なかった可能性がある。

また、「大学受験等の進学に役立つ可能性がある」という回答が、1 年生は 3 番目、2 年生、3 年生は 5 番目に多い回答であった。詳しくは、第 5 章で述べることとするが、探究学習を大学進学に活用できる可能性がある、生徒たちも感じていることがわかる。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

全学年において、「勉強の息抜きになる」という意見も多かった。特に2年生、3年生の回答に多く、大学受験が近づくにつれ増加していく勉強量に対し、このような、座学ではない一見「勉強ではない」活動は、多少ではあるものの、息抜きの場として機能していたことが推測される。

ネガティブな意見

1年生、2年生の不安に感じている意見、3年生の否定的に感じている意見をまとめ、ネガティブな意見とした。図8、図9、図10はその結果をまとめたものである。

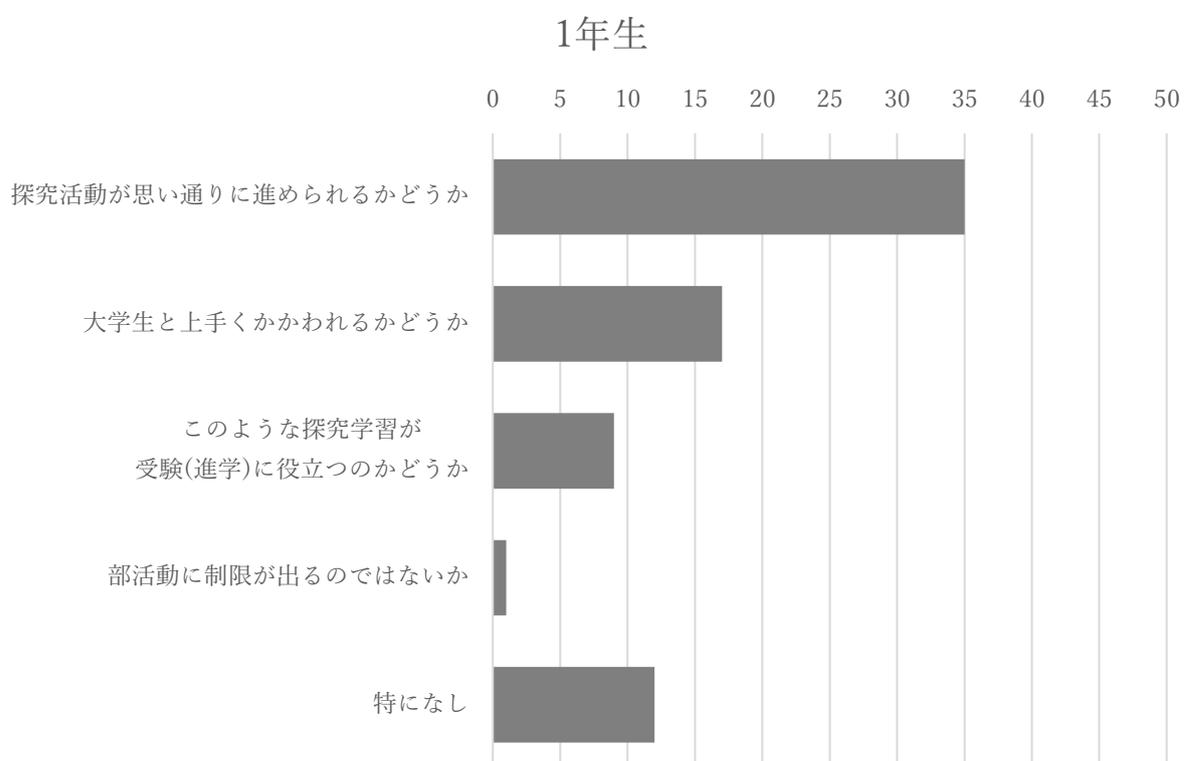


図8 1年生が「探究飛騨」に対して感じているネガティブな意見

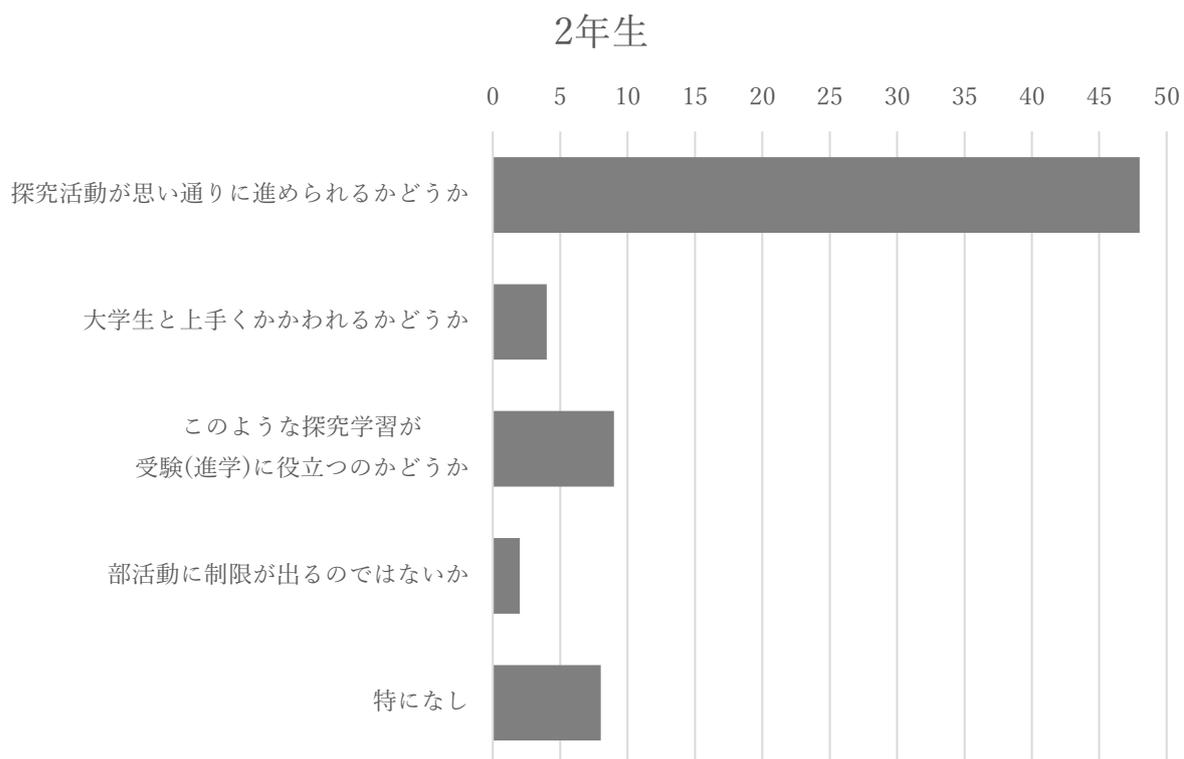


図 9 2年生が「探究飛驒」に対して感じているネガティブな意見

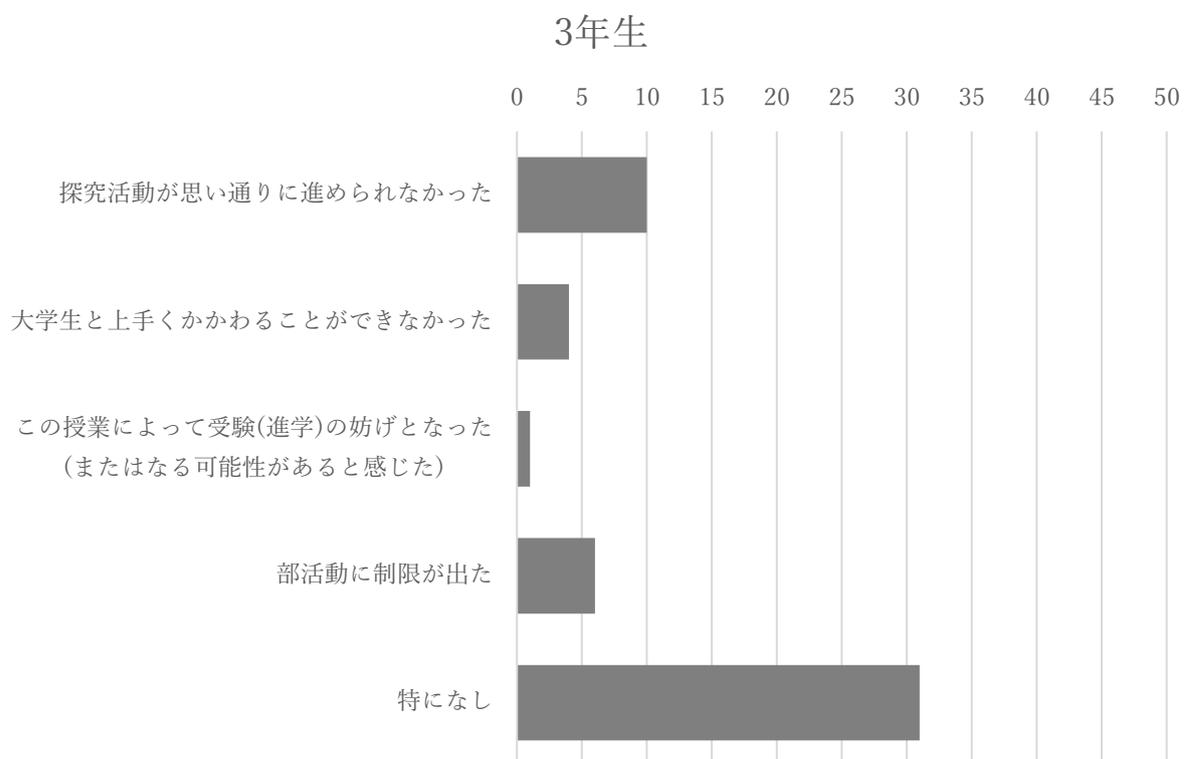


図 10 3年生が「探究飛驒」に対して感じているネガティブな意見

図 8 で示した 1 年生の結果、図 9 で示した 2 年生の結果において最も多かつ

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

た意見が、「探究活動が思い通りに進められるかどうか」というものであった。前述したように、まだ探究学習に触れたことが無い1年生、まだ結果を出すことができていない2年生にとって、このような不安を感じるのは、当然のことである。しかし、図 10 で示したように、3年生になると「探究活動が思い通りに進められなかった」という意見は、格段に少なくなる。実際に探究学習を最後まで行くと、このような不安は払拭され、多くの生徒が自分たちなりに満足する結果を挙げることができたと考えられる。

また、1年生において2番目に多かった意見は、「大学生と上手く関われるかどうか」であった。このような大学生についてのネガティブな意見は、探究学習開始後の2年生と、探究学習終了後の3年生では、大きく減少する。前述したような大学生との関わりがない状況のために、当初は不安を感じるものの、実際に接してみると、その不安は払拭されていると考えられる。

最後に、3年生においては「特になし」という回答が最も多かった。探究学習開始前、実施中の生徒と比較して、このような意見が多いということは、多くの生徒が満足して本活動を終えることができたことを示している。

5. 授業発案者へのインタビュー調査

第4章で述べたアンケート調査は、授業を受ける側の生徒の現状を分析したものであった。本章では、当時「探究飛騨」の授業を発案した教師であった、現学校法人飛騨学園理事長の小林隆徳氏に対して行ったインタビュー調査の結果から、授業設計当時に込められた理念等が現在の生徒の心境に表れているのか、明らかにすることを目指した。また、これに加え、8月、9月に行った生徒へのアンケート調査の結果も示しながら、現状の「探究飛騨」についてもお話を伺った。

5.1. 調査概要

インタビュー調査は、2025年11月10日に実施した。ここで尋ねた内容は主に以下の3点である。

1点目は、「探究飛騨」開始時の経緯である。どのような理念から、このような学習が開始されたのかを尋ね、本研究で注目しているUターン等への影響が当初から検討されていたのかを明らかにすることを目指した。

2点目は、高校と地域との関係性である。1点目と重なる部分も多いが、本研究のテーマである「地域」との関連について、より深く尋ねた。

3点目は、現状の「探究飛騨」に対する生徒の意識についてである。アンケート調査からは、大学生との関わりや勉強の息抜きなど、探究学習本来の目的ではない副産物的な役割を生徒が期待し、満足していることが明らかになった。これらの点をどのように感じているのか、またこれらは当初の計画時から検討されていたことなのかを尋ねた。

5.2. 調査結果

5.2.1. 「探究飛騨」開始時の経緯

ここでは、1点目の「探究飛騨」開始時の経緯についてのインタビュー結果を述べる。

「探究飛騨」の授業が導入された2014年度、小林氏は副校長であった。

探究学習を始める構想は、2012年頃に「奇跡と呼ばれた学校⁶」に記された事例を知ったことに始まるという。同書は、いわゆる「落ちこぼれ校」と呼ばれていた京都府立堀川高等学校が進学実績を飛躍的に伸ばした事例を、同校校長であった荒瀬克己氏が記したものである。この事例における1つの施策が、探究学習であった。小林氏によれば、この事例を目にしたことが探究学習の構想を始める第一段階であった。一方、この時点では探究学習の計画までは具体化していなかったようである。

その後、構想がより具体化したのが、同年の「乗鞍フォーラム」での活動であった。この「乗鞍フォーラム」は、地元の高校生らが参加し、乗鞍のあり方を考え、提言するという活動であった。詳しくは後述するが、この活動において、高校生と大学生の交流を目にし、小林氏の中で高大連携を含めた探究学習を実現しようという思いが強まったという。

構想が実現した契機は、文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール」事業への申請であった。同事業は、「生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る（文部科学省,2014）」ことを目的に、このような育成に関する教育課程等の研究開発を行う高等学校や中高一貫教育校をスーパーグローバルハイスクールに指定、支援するもので

⁶ 荒瀬(2007)

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

あった。一般的に、このようなグローバル人材の育成においては、生徒の海外への積極的な派遣や、外国語教育が注目されることが多い。しかし、小林氏を含め高山西高等学校においては、単なる語学能力の向上のみならず、地元である飛騨地域、広くは日本について海外へ発信できる人材を、グローバル人材と位置付けた。

堀川高等学校の事例から、探究学習の実施に目をつけていた小林氏は、このような人材の育成へ向けて、3年構想の探究学習を計画したという。1年目は、「飛騨学」と名付け、高山市海外戦略室長（現高山市長）や高山市商工観光部長、飛騨高山まちの博物館館長、雷鳥博士⁷、乗鞍岳自然案内人など、飛騨に深く関わる人々の講話等から飛騨について知ることを目指した。2年目は、本格的な探究学習として、自ら課題を設定し、調べ、分析し、発表するという、現在の「探究飛騨」と同様の活動を目指した。そして3年目には、この内容を英訳し発表するという過程にすることで、「地元の魅力を海外に発信できる人材」の育成を目指した。後述するように、現在はこの3年体制での活動は行っていないものの、これが現在の「探究飛騨」の授業へとつながっている。

このような活動の実現に向け、2014年に高山西高等学校は、慶應義塾大学の長田進氏に対して高大連携の依頼を行っている。スーパーグローバルハイスクールへの指定には高大連携が不可欠であったことに加え、後述するように探究学習における大学生のサポートは極めて有意義なものになると考えていた。その後、2016年にスーパーグローバルハイスクールへの指定は断念したものの、2014年から岐阜県の「ぎふグローバル人材推進育成事業」がスタートしており、現在までこの事業で県からの助成を受け、「探究飛騨」が実施されている。

⁷ 中村浩志信州大学名誉教授。ライチョウ研究の第一人者であり、地域では「雷鳥博士」の名で知られている。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

5.2.2. 地域との関係

前項では、1点目の「探究飛驒」が行われるようになった経緯について、小林氏から聞き取りをした内容をもとにまとめた。この項では、大まかな質問項目の2点目として挙げた、本研究で注目している「地域」との関連について様々な点から聞き取りした内容をまとめる。

地域をテーマとした所以

第2章第2節で述べたように、総合的な探究の時間のテーマは、学校ごとに決定することができ、必ずしも地域をテーマとする必要はない。高山西高等学校では、なぜ飛驒地域を探究学習のテーマとしたのだろうか。小林氏によれば、その所以は2点あるという。

1点目は、「地元のことを語れる人材」という、同校の考えるグローバル人材の育成のためである。このために、前述した当初の3年構想が計画されている。現在では、この3年構想は教員側の負担などから廃止され、基本的には2年時の「探究飛驒」のみの1年構想となっている。しかし、韓国やシンガポールの学校との交流⁸の際の発表や、テキサスの姉妹校でのプレゼンなど、当初3年次に行っていた「地元について海外に発信する」というプロセスは、部分的に継続されているという。

2点目は、探究学習の過程で、生徒に高山の魅力に自然と気が付いてもらうためである。小林氏は、飛驒地域に大学がないため、生徒が進学のために一度高山から離れることは仕方がないと考えていた。ただし、進学校として人材育成に励んだ結果、優秀な生徒を大学進学者として輩出していくことは、結果的に地元から出ていく若者を増やしていることと同義になってしまうジレンマを抱えることになる。このような問題への対応として、地域を題材とした探究学

⁸ 同校では、留学生の受け入れを積極的に行っており、例年、アメリカ、韓国、シンガポールなどの提携校から、高校生が来校している。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

習が、卒業後ないし老後に、地元に戻ってきてくれる1つのきっかけになるのではないかと考え、地元である飛騨地域を探究学習の題材と設定したという。なお、この考え方には、隠岐島前高校の事例が大きな影響を与えているという。同校は、地域と協働した「高校魅力化プロジェクト」の発祥の地であり、これに関する書籍も刊行されている⁹。このプロジェクトでは、学校と地域を魅力化することで郷土愛や主体性を育み、一度島を離れた後に再び故郷の価値を再認識してUターンへとつながるといふ流れを実現している。この流れが飛騨地域でも実現可能だと小林氏は構想したわけである。

探究学習が地域に直接的に与える役割

ここまで述べた探究学習と地域との関係では、グローバル人材の育成や将来的にUターンする人材の育成など、生徒の能力・愛着を育てることに焦点が当てられていた。一方、「探究飛騨」には、生徒が探究・発表した内容が、直接地域に役立った事例が存在する。例えば、「探究飛騨」において検討し提案された、ARで高山城跡を再現するという企画が、高山市教育委員会文化財課により取り入れられた事例が挙げられる。

また、「探究飛騨」の活動には、地元の地方議員が視察に訪れている。かつては、例年2月10日前後に市議会で市内の他の高校生と共に地域に関する発表を行っていたが、2020年以降は新型コロナウイルスの影響により、この発表会が無くなり、議員側が訪問するという現在のシステムに変化した。2024年の議員と学校間の意見交換によると、高校生のアイデアは、市議会議員にとって新鮮で画期的なものとして注目しているようだ。探究学習の内容が、地域に何かしらの影響を与えることが、地域側からも期待されていることが伺える。

一方、小林氏によれば、生徒の探究学習がここまで発展することは、当初の

⁹ 山内・岩本・田中(2015)

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

計画や予想の想定外だったようである。高校生の考えが、地域にそのまま取り入れられることは、期待以上の出来事であったとのことだった。

5.2.3. 「探究飛騨」の現状について

本項では、3点目として挙げた、現状の「探究飛騨」について、インタビューした結果を述べる。「探究飛騨」の役割について、「大学生との関わり」、「勉強の息抜き」、「進学補助」という3つの副産物的な役割について尋ねた。これらの現状を踏まえて、「探究飛騨」の今後についても簡単にお話を伺った。

大学生との関係

生徒のうち、特に探究学習が終了した3年生が、多く好意的に挙げていた「大学生との関わり」について、当初から検討されていたものだったのかを含めて尋ねた。

小林氏によれば、探究学習の計画当初から、高大連携は計画の中心の1つと位置付けていたとのことだった。第一のモデルは、前述した京都府立堀川高等学校であった。同校では、探究学習を京都大学の学生がサポートしており、同様の環境を整えることができれば効果が見込まれると考えたそうである。また、前述した乗鞍フォーラムの事例においても、探究学習をサポートされる側となる高校生たちにとってメリットがあるのはもちろんのこと、探究学習をサポートする側の大学生もやりがいを感じており、高校生と大学生のそれぞれにメリットがある活動にできるのではないかと考えたそうである。

これらの事例から、探究学習を行う際に、大学と連携するというのは、既定路線だったようである。

他校で多く見られるように探究学習を毎週の時間割の中に組み込むのではなく、「探究飛騨の日」として一学校行事の扱いで設定したのも、じっくりと取り組むことができないのではないかという懸念に加え、大学生が訪問できる日程を設定しやすくなるという判断も大きいという。現在でも、大学生が活動をサ

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

ポートすることは、高山西高等学校の探究学習の魅力だと考えていた。同校の学校紹介用のパンフレットを見ても、「探究飛騨」について、慶應義塾大学の学生がサポートしていることが述べられており、他校と差別化している様子が伺える。また、生徒へのアンケート調査の結果についても、高大連携の魅力が生徒にも伝わっていることに納得していた。

では、なぜ大学生の存在にこだわるのか。その理由として、小林氏は、飛騨地域に大学がないという事情を挙げていた。大学生が身近にいない状況の中、大学生活がどのようなものなのかなど、プライベートに近い話をできることも1つのメリットであると考えていたようだ。必ずしも探究学習に関わる話でなくとも、大学生からの情報は生徒にとって有用だと考えていたと思われる。

また、探究学習を開始してから如実に明らかになった大学生の存在によるメリットとして、生徒への知識のインプットの質の向上も挙げておられた。授業などのいわゆる座学ではなく、時には他愛のない話も交えながら知識も習得できる環境は非常に有意義なものであるという。

例えば、内閣府が提供する地域経済分析システム「RESAS」の習得のプロセスを挙げている。このシステムは、地域について考える「探究飛騨」のプロセスにおいて、非常に多く利用されているツールであるが、教師ではなく、大学生が対話の中で自然と教授したことによって、生徒側も使いこなせるようになっている。自分と比較的年代が近い大学生に教えてもらえる環境は、いわゆる座学の学習よりも生徒にとって満足度が高いものとなっているようだ。生徒が能動的に大学生と関わり、技術をも習得できる点が利点となったようである。

これらの回答から、生徒へのアンケート調査から、副産物的な役割だと考えられていた「大学生との関わり」が当初から計画されたものであるとわかった。教師の立場からみても、大学生の存在は様々な点で非常に大きいもののようにある。

勉強の息抜き

生徒のうち、特に1、2年生が挙げていた「勉強の息抜き」としての役割については、当初から目的としているものではなかった。ただし、前述のような大学生との交流は、たとえ探究学習の内容から外れたとしても、意義のあるものだと考えておられた。

進学への補助

生徒へのアンケート調査の中でも、「探究飛驒」について、「大学受験等、進学に役立つ可能性がある」という意見が一定数あったが、進学校である以上、大学入試を意識する必要があるのは当然である。そこで、当初の計画も含め、探究学習の大学入試への活用についてもお話を伺った。

小林氏も、当然大学進学について意識されていたようである。前述の堀川高等学校の事例から、小林氏自身は、探究学習が大学入試にも役立つことを確信していたとのことだった。しかし、特に探究学習の実施初年度は、生徒の保護者、さらには校内でも、その効果は半信半疑であり、不安が広がっていたという。

この不安が一掃されたのは、探究学習の実施1年目の生徒の合格実績であった。一生徒が名古屋大学医学部への合格を果たし、また二名の生徒が岐阜大学医学部の地域枠に合格を果たした。当時の生徒たちによれば、「探究飛驒」で地域医療の課題に取り組んできた実績をもとに、小論文や口頭試問において、自信をもって回答することができたという。このような合格を契機に、校内、校外共に、入試にも本当に役立つのではないかという雰囲気を生むことができたのではないかと、小林氏は振り返っていた。

このような「大学進学への補助」としての役割は、年々高まっていると小林氏は述べている。現在では、このような医学部入試に加え、大学入試全体においても改革が行われ、このような活動の経験が重要となることも多いという。例

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

えば、特に難関校の推薦入試の推薦書では、探究学習について記載する欄が存在することも多い。この場合は、探究学習を行っていないと、生徒側のみならず教師側が困難に直面することにもつながる。小林氏は、大学が、思考力・判断力・表現力を有する生徒を求めていると分析していた。探究学習を行うことは、このような生徒を育成することに繋がると考え、2023年にはそれまで「探究飛驒」を行っていた特進Ⅰの2クラスだけでなく、特進Ⅱの1クラスを含めた計3クラスに実施クラスを拡大している。小林氏によれば、今後もしもできることならば実施クラスを拡大していきたいが、教員側の負担も大きく、実現の目処は立っていないとのことであった。

6. 調査結果のまとめと考察

本研究では、第4章において、学習を受ける側の生徒の視点から検討するためのアンケート調査、第5章において、学習を設計する側の教師の視点から検討するためのインタビュー調査について述べた。まずは、これらの結果をもう一度簡単にまとめておく。

第4章において述べたアンケート調査において、明らかになった点は主に3点である。

1点目は、今回の調査からは、地域を題材とした探究学習だけでは、生徒の地域への愛着が高まるとはいえないということである。後述するような調査上の課題はあったものの、地域への愛着が高まっていることを明確に示すことができなかった。一方、地域への愛着を強める要因としては、小学校卒業以前の地域への継続的な居住という周囲の環境が関連していると読み取ることができた。

2点目は、地域への愛着が強いほど、積極的なUターン意向を持つことである。この点については、先行研究でも触れられていたが、同様の結果をデータから確認することができた。このような関連の理由としては、家族や仕事の存在が大きく、これに対して地域への思いや貢献意欲は小さかった。

3点目は、生徒たちは、探究学習について、地域について詳細に知ることができることに加え、大学生と関わる場、勉強の息抜きとしての場、進学に役立つ場など、その副産物的な役割を肯定的に捉えていることである。「探究飛騨」への肯定的な意見として、「飛騨について詳しく知ることができる」という選択肢に最も多くの人数が集まったが、他の選択肢にも一定数の人数が集まっており、単に地元を知るだけではない効果があったとわかる。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

一方、第5章において述べたインタビュー調査において、明らかになった点は主に2点である。

1点目は、探究学習の題材として地域を選んだ理由の1つに、生徒の地域への愛着を高め、将来的なUターンの推進になればという考えがあったことである。あくまで、学校が考える「グローバル人材の育成」に向けた目的に付随するものではあるものの、1つの目的とされていることを確認することができた。

2点目は、大学生との関わり、進学補助などの、探究学習のいわゆる副産物的な役割も、授業発案当時から計画されていたものであったことである。これらの役割が、偶然の産物ではないことを確認することができた。また、現在もこれらの役割への認識に変化はないとのことであった。

上記の結果から、第1章第1節で示した仮説「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育て、生徒のUターン意向の上昇につながる」について考える。仮説の前半となる「地域を題材とした探究学習が、生徒の地域への誇り・愛着を育てる」点と、仮説の後半となる「生徒の地域への誇り・愛着が、生徒のUターン意向の上昇につながる」点の2つに分けて検討を行う。

前半部について、第4章のアンケート調査の結果は、否定的な見解を示している。調査からは、地域を題材とした探究学習によって生徒の地域への愛着が高まるというエビデンスを得ることはできず、むしろ小学校卒業以前からの地域への継続的な居住という、長期的な生活環境との関連が深いことが明らかになった。この結果は、一教育プログラムという短期的な介入による効果が、継続的な居住という長期的な生活環境の効果と比べると、限定的であることを示している。

後半部について、アンケート調査の結果からは、「地域への愛着が強いほど、積極的なUターン意向を持つ」という関連性を確認でき、Uターン意向の背景として、地域への愛着が重要な役割を果たしているという仮説自体は支持され

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

る。しかしながら、Uターン意向の理由として家族の存在が強く重要視されている点から、地域そのものではなく、「家族が住んでいる地域」が重要である可能性がある。

よって、前半部が否定されるため、仮説の全体像は成立しないと判断せざるを得ない。一方、第5章のインタビュー調査の結果から、仮説のようなプロセスが、地域を題材とした探究学習を設計する際の一要因となっていることがわかった。

今回、各調査の結果から、地域を題材とした探究学習自体は、生徒、教師の双方から肯定的に評価されているといえる。「地域を知る」という点で満足感を覚えた生徒は多かったが、これに加え、探究学習の副産物的な役割を生徒と教師の双方が肯定的に捉えていた。特に、教師側の視点では、大学生との関わりや進学補助といった役割を当時から計画していたことが判明した。

これらの結果を踏まえると、当初の仮説は全体として成立しなかったものの、地域を題材とした探究学習が持つ価値を明らかにし、併せて今後の課題を明確にすることができたといえる。

アンケート調査によれば、生徒たちは、地域について詳細に知る機会を肯定的に捉えていた。地域を題材とした探究学習において、生徒が、地域への知的な関心や興味を確かに有していることを示している。しかし、前述したように、こうした地域への興味だけでは、将来的なUターンという重要な決断に結びつけるには不十分である。地域を知り興味を持ったとしても、将来この場所で自分が何ができるかなどの具体的な生活やキャリア形成と結びつかない限り、その影響が大きいとは言えない。

大学生との交流や勉強の息抜き、進学補助といった副産物的な役割は、楽しい、有益などと感じさせ、生徒が学習に主体的に取り組むための動機づけとして機能していた。一方、このような副産物的な役割は、動機づけとしての役

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

割は非常に大きいものの、Uターンに結びつくものではない。

したがって、副産物的な役割を動機づけとして地域を題材とした探究学習に取り組む、地域に対して興味を持った後、この興味や意欲をUターン意向に結び付けるための施策が重要である。Uターン者を求める自治体においては、地域への抽象的な思いを具体的にするために、Uターンを行った際の具体的な役割や活動を明確に示すことが必要不可欠であると考えられる。

7. おわりに

本研究では、地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に影響を与えるのかについて、学習当事者である生徒へのアンケート調査、授業発案者である教師へのインタビュー調査を通じて明らかにすることを目指した。アンケート調査からは、その関連を明らかにすることはできなかったが、インタビュー調査から、その関連が目的の1つであったことを明らかにすることができた。また、このような関連に加えて、副産物的な役割が期待されていることを、それぞれの調査から明らかにすることができた。

一方、本研究にはいくつかの技術的な課題が存在した。

まず1点目は、アンケート調査について、パネルデータを取得することができなかった点である。これが最も大きい課題となった。1年間という本研究の制約上、探究学習による変化を、1年生から3年生まで、別人のデータで分析することとなった。本来、教育効果を分析する場合、分析する教育を行う群と行わない群の2つに分け、DID分析を行うのが正しい手法である。今回の分析では、各学年に存在する可能性がある固有の特徴を消去できなかったため、仮説の前半部を示すことができなかった可能性がある。例えば、2年次の愛着度が最も低かったことについても、単に当該学年の生徒の愛着が全体的に低いのみで、1年次、3年次の時点でも低かった可能性は否定できない。また一方で、将来に向けた進路選択の必要性を迫られる時期であり、将来への不安等が影響し、2年生で愛着度が低くなる傾向がある可能性も否定できない。よって、例えば現在の1年生に対して、2年生へ進級した来年度に同様の調査を行っても値が低くなるとは限らない。個々が元々持っていた地域への愛着を踏まえてその変化を検討するには、より長い期間で、各人のパネルデータを収集すること

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

が必要となる。

2点目として、質問項目の不足が挙げられる。アンケート調査において、予想していたものと異なる結果も存在した。例えば、大学生との関わりを肯定的に捉えている高校生がこれほど多いことは想定外であった。その結果、より内容を掘り下げるための質問を準備することができなかった。今後同様の調査を行っていく際は、今回の集計を踏まえ、質問を再構成すると、この学習の効果をより詳細に分析することができるようになる。

3点目として、本研究の結論が、全国的なものとは必ずしも言えない点である。本研究では、私立高山西高等学校で調査を行った。そのため、飛騨地域に4年制大学が存在しない点など、飛騨地域の特殊性が、各調査の結果に影響していた。公立学校か私立学校か、地域に大学が存在するか、大学への進学率など、それぞれの学校の特徴が、総合的な探究の時間の現状に影響している可能性は否定できない。より普遍的な結果と結論付けるには、他校と比較しながら調査を行う必要性がある。

今後の展望として、本研究で検証した仮説について、より正確に明らかにするためには、上記の課題を解決した研究を行う必要がある。しかし、探究学習の前後のパネルデータを集める都合上、最低でも3年がかかる研究となることには注意が必要である。

また、前述したように、アンケート調査の結果から、探究学習の副産物的な効果に焦点を当てたが、これらの効果が必ずしも「地域を題材とした」探究学習に限った効果であるとは限らない。地域以外を題材として探究学習を行った場合と比較することで、双方の効果がより鮮明化するだろう。特に、高大連携については、地域以外を題材として探究学習を行っている学校でも行っている場合がある。しかしながら、地元の医療について探究し、地域枠により医学部に進学する等、地域を題材とすることに価値がある場合が存在するのも事実で

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

ある。

このように、生徒がサンプルとなるため、正確な分析を行うには多くの制約が伴う。しかし、地域を題材とした探究学習の効果をより明らかにすることは、地域活性化への教育の効果を考えるうえで、やはり重要であると考えている。これらの制約を克服してでも、研究を行う必要性があると考えている。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

謝辞

インタビュー調査にご協力いただいた小林隆徳氏(学校法人飛騨学園理事長)、アンケート調査にご協力いただいた高山西高等学校の生徒の皆様、および調査の実施にご協力いただいた同校の先生方に、謝意を表したい。

参考資料一覧

- 荒木淳子・高橋薫・佐藤朝美(2024)「高等学校における探究学習の経験と大学での学び・キャリア探索との関連」(『日本教育工学会論文誌』Vol48, No.2、日本教育工学会)
- 荒瀬克己(2017)『奇跡と呼ばれた学校：国公立大合格者 30 倍のひみつ』(朝日新聞出版)
- 江口貴康(2002)「地方高校生の地域愛着意識と U ターン：島根県の高校生調査から」(『社会システム論集：島根大学法文学部紀要社会システム学科編』Vol.7、島根大学法文学部)
- 大塚智詩(2019)「『総合的な学習の時間』から『総合的な探究の時間へ 世界遺産を活用した『総合的な学習の時間』の活動報告」(『学習院高等科紀要』Vol.17、学習院高等科)
- 岡崎京子・後藤春彦・山崎義人(2004)「U ターン者増加の過程における転入要因の変遷 ～宮崎県西米良村を事例として～」(『都市計画論文集』Vol.39-3、日本都市計画学会)
- 小川哲哉(2025)「高校生のキャリア形成を支援する総合的な探究の時間の授業実践 に関する研究」(『茨城大学教育実践研究』Vol.45、茨城大学教育学部附属教育実践総合センター)
- 長田進(2020)「高校が取り組む探究型プログラムに参加して考えたこと：高山西高等学校の『探究飛騨』に関係した事例より」(『慶應義塾大学日吉紀要．社会科学』Vol.31、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会)
- 掛本健太・中村美智太郎(2023)「キャリア教育の展望としての『総合的な探究の時間』の実践可能性：学校全体で取り組むキャリア形成支援の実現を目指して」(『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）』)

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

Vol.74、静岡大学大学院教育学領域）

- 片岡佳美(2002)「青年の定住意志を高める要因—島根県高校生調査の結果から—」(『社会システム論集：島根大学法文学部紀要社会システム学科編』Vol.7、島根大学法文学部)
- 加藤智(2022)「初等教育におけるサービス・ラーニング 型総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する研究」(『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.38、日本福祉教育・ボランティア学習学会)
- 北山大地(2021)「地方都市における高校生の地域への愛着・Uターン意識・学力の3関係 --X 地域の地方創生戦略における高校生の意識調査」(『地域連携教育研究』Vol.6、京都大学)
- 倉岡正高(2020)「中高生と地域の大人による課外活動が社会参画意識と学習意欲にもたらす効果 —地域との協働を基盤にした総合的な探究の時間の取り組みに向けた可能性—」(『神奈川大学心理・教育研究論集』Vol.47、神奈川大学教職課程研究室)
- 齋藤嘉克・佐藤宏亮(2019)「若年層のUターンを促進する要因と形成プロセスに関する研究：奄美大島龍郷町秋名・幾里集落を対象として」(『都市計画論文集』Vol.54-3、日本都市計画学会)
- 笹尾幸夫・小林整次(2023)「『総合的な探究の時間』の指導法について —学校現場での実践考察を含めて—」(『南山大学教職センター紀要』Vol.10、南山大学教職センター)
- 佐々木秀之・中沢峻・友淵貴之(2024)『地域共創型実践教育・入門：コミュニティ・オーナーシップの醸成を目指して』(北樹出版)
- 佐藤正昭(2002)「『高大連携』の背景といくつかの課題」(『青森保健大紀要』Vol.4, No.1、青森県立保健大学紀要編集委員会)
- 塩見一三男(2023)「地域との繋がりが若者のUターンに与える影響に関する

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- る研究－地方出身・東京圏進学者を対象としたUターン実施に関するケーススタディ」（『日本地域政策研究』Vol.30、日本地域政策学会）
- 清水優菜・荒井英治郎(2023)「総合的な探究の時間における高大連携の効果の検討」（『日本教育工学会論文誌』Vol.47, No.1、日本教育工学会）
 - 下村勉・小山史己・白井靖敏・鷲尾敦・須曾野仁志・落合英次(2005)「『総合的な学習の時間』の学習効果の分析」（『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』Vol.25、三重大学教育学部附属教育実践総合センター）
 - 杉山成(2012)「大学生における地元志向意識とキャリア発達」（『小樽商科大学人文研究』Vol.123、小樽商科大学）
 - 高橋亜希子・村山航(2006)「総合学習の達成の要因に関する量的・質的検討－学習様式との関連に着目して」（『教育心理学研究』Vol.54, No.3、日本教育心理学会）
 - 高山西高等学校(2025)「進路に応じたクラス分け」（<https://takanishi.ed.jp/class/class.html>, 2026年1月6日最終確認）
 - 寺西望・木村竜也・伊藤大輔(2022)「PBLに基づいた『総合的な探究の時間』の実践」（『日本教育工学会研究報告集』Vol.22, No.2、日本教育工学会）
 - 西村健・南條隆彦(2017)「若者から見た地域への愛郷心・愛着と帰巢性の関係～島田市の高校生アンケート調査等から見た地方創生の可能性～」（『公共コミュニケーション研究』Vol.2, No.1、公共コミュニケーション学会）
 - 橋本祥夫・山下正巳(2022)「『地域再生』を意図した小学校歴史学習の開発－ふるさと学習『かめおか学』亀山城プランを事例に－」（『教育実践方法学研究』Vol.7, No.1、日本教育実践方法学会）
 - 引地博之・青木俊明・大淵憲一(2009)「地域に対する愛着の形成機構－物

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

理的環境と社会的環境の影響－」（『土木学会論文集 D』 Vol.65, No.2、土木学会）

- 藤村宣之・橘春菜・名古屋大学教育学部附属中・高等学校(2018)『協同的探究学習で育む「わかる学力」』（ミネルヴァ書房）
- 文部科学省(2014)「平成 26 年度『スーパーグローバルハイスクール』に関する研究開発の実施希望について（依頼）」（https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgsh/1343301.htm, 2026 年 1 月 2 日最終確認）
- 文部科学省(2018a)「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）」（https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf, 2026 年 1 月 2 日最終確認）
- 文部科学省(2018b)「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説：総合的な探究の時間編」（https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf, 2026 年 1 月 2 日最終確認）
- 山内道雄・岩本悠・田中輝美(2015)『未来を変えた島の学校：隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』（岩波書店）
- 山口千花(2025)「地域に愛着を持ち、たくましく生きる児童の育成 地域人材・地域資源の継続的な活用を目指したカリキュラム・マネジメント」（『令和 6 年度教職大学院実践研究論文』、宮城教育大学）
- 横山尚登(2016)「『地域探究の時間』の取組みで地域リーダーとなる人材を育成」（『鳥取大学教育研究論集』 Vol.6、鳥取大学大学教育支援機構教員養成センター）
- 渡邊一成(2022)「まちづくりを題材とした高大連携による『総合的な探究の時間』（地域探究活動）の取組方法に関する一考察」（『福山市立大学都

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

市経営学部紀要』Vol.14、福山市立大学都市経営学部）

- 渡辺恵子・森川想(2023)「地域と協働した探究学習と高校生の意識・態度の継時的変化」（『国立教育政策研究所紀要』Vol.152、国立教育政策研究所）

付表

第4章で述べたアンケートについて、原票を以下に示す。

学校から支給されているメールアドレスを記入してください。高山西高校の生徒であることの確認にのみ使用します。

Q1. いつから 飛騨地域に 在住しているか教えてください。（飛騨地域内の引っ越しは考えないものとします。）1つだけマークしてください。

- 生まれてからずっと飛騨地域に住み続けている
- 小学校以前に飛騨地域に来た
- 小学校で飛騨地域に来た
- 中学校で飛騨地域に来た
- 高校入学時に飛騨地域に来た

Q2. 性別を教えてください。1つだけマークしてください。

- 男
- 女
- 回答しない
- その他（自由解答欄）

Q3. 現在同居している家族について教えてください。1つだけマークしてください。

- 親(少なくとも一方が飛騨地域の出身)と同居している
- 親(飛騨地域以外の出身)と同居している
- 親(飛騨地域の出身)と祖父母と同居している
- 1人暮らし(寮暮らし)である
- その他（自由解答欄）

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

Q4. 現在の居住地域を教えてください。1つだけマークしてください。

- 高山市内
- 下呂市内
- 飛騨市内
- 白川村内
- その他（自由解答欄）

Q5. 高校卒業後の進路の予定について教えてください。1つだけマークしてください。

- 就職
- 大学・専門学校に進学
- その他（自由解答欄）

Q6. 高校卒業後に飛騨地域を離れる予定はありますか。1つだけマークしてください。

- 離れる予定がある
- 離れる予定はない
- わからない・悩んでいる

Q6で「離れる予定がある」と答えた方へ

Q7. 飛騨地域から離れようと思う理由を教えてください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 飛騨地域では学びたい内容が学べないから(大学・専門学校など)
- 飛騨地域にはない職種の仕事に就きたいから
- 就職先が飛騨地域にないから
- 家族から離れて生活したいから
- 飛騨地域から離れて生活したいから

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- その他（自由解答欄）

Q8. どの地域を希望していますか。（選択肢にないものは記述をお願いします。）1つだけマークしてください。

- 岐阜県内の他地域
- 愛知
- 富山
- 首都圏
- 関西圏
- その他（自由解答欄）

Q9. 将来飛騨地域に戻る意向はありますか。（選択肢にないものは記述をお願いします。）1つだけマークしてください。

- すぐに飛騨に戻らなければいけない理由がある
- 可能な限り早く飛騨に戻ってきたい
- しばらく飛騨以外の場所で生活した後、いずれ飛騨に戻りたい
- 引退後、飛騨に戻ってきて生活したい
- 飛騨に戻る意向はない
- 現時点ではわからない
- その他（自由解答欄）

Q10. Q9 を選んだ理由に関係する問題です。あなたの考えに最も近いものを選んでください。1行につき、「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない・関係がない」から、1つだけマークしてください。

- 家族と一緒にいたい
- 地域に就きたい職がある
- 地域に貢献したい

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- 地域に対して良いイメージがある

Q11. Q10 で選んだもの以外に、Q9 について何か理由があればお書きください。

Q12. 以下の 5 つの選択肢の中で当てはまるものをすべて選んでください。1 行につき、「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない・関係がない」から、1 つだけマークしてください。

- 地域を出る必要が無ければ、この地域に住み続けたい
- 自分は地域社会の一員だ
- この土地は無くってはならない場所だ
- 地域の人々は大切な存在だ
- この土地は住みよい場所だ

Q6 で「離れる予定はない」と答えた方へ

Q7. 飛騨地域に残ろうと思う理由を教えてください。(当てはまるものを選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 家族や地域から離れて生活できない理由(介護など)があるため。
- 家族が好きで離れたくないという思いがあるため。
- 地元で就きたい職があるため。
- 地域に貢献したい気持ちがあるため。
- その他（自由解答欄）

Q8. 将来的に飛騨地域から離れて生活してみたいという考えはありますか。1 つだけマークしてください。

- ある
- ない
- どちらともいえない

Q9. Q8 についてそのように考える理由を教えてください。(当てはまるものを

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。）

- いずれ飛騨地域にはない職種の仕事に就きたいため。
- 家族から離れて生活したいため。
- 飛騨地域から離れて生活したいため。
- 飛騨地域以外の場所で何らかの経験を積むことは、この場所で生活しているうえでも必要だと考えるため。
- その他（自由解答欄）

Q10. 以下の5つの選択肢の中で当てはまるものをすべて選んでください。1行につき、「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない・関係がない」から、1つだけマークしてください。

- 地域を出る必要が無ければ、この地域に住み続けたい
- 自分は地域社会の一員だ
- この土地は無くてはならない場所だ
- 地域の人々は大切な存在だ
- この土地は住みよい場所だ

Q6で「わからない・悩んでいる」と答えた方へ

Q7. 離れる選択肢を消すことができない理由を教えてください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 飛騨地域では学びたい内容が学べないから(大学・専門学校など)
- 飛騨地域にはない職種の仕事に就きたいから
- 就職先が飛騨地域にない可能性があるから
- 家族から離れて生活したいから
- 飛騨地域から離れて生活したいから
- その他（自由解答欄）

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

Q8. 留まる選択肢を消すことができない理由を教えてください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 家族や地域から離れて生活できない理由(介護など)があるため。
- 家族が好きで離れたくないという思いがあるため。
- 地元で就きたい職があるため。
- 地域に貢献したい気持ちがあるため。
- その他（自由解答欄）

Q9. 仮に飛騨地域から離れる決断をしたとして、将来地域に戻る意向はありますか。(選択肢にないものは記述をお願いします。)1つだけマークしてください。

- すぐに飛騨に戻らなければいけない理由がある
- 可能な限り早く飛騨に戻ってきたい
- しばらく飛騨以外の場所で生活した後、いずれ飛騨に戻りたい
- 引退後、飛騨に戻ってきて生活したい
- 飛騨に戻る意向はない
- 現時点ではわからない
- その他（自由解答欄）

Q10. Q9を選んだ理由に関係する問題です。あなたの考えに最も近いものを選んでください。1行につき、「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない・関係がない」から、1つだけマークしてください。

- 家族と一緒にいたい
- 地域に就きたい職がある
- 地域に貢献したい
- 地域に対して良いイメージがある

Q11. Q10で選んだもの以外に、Q9について何か理由があればお書きください。

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

Q12. 仮に高校卒業後飛騨に残る決断をして、将来的に飛騨地域から離れて生活してみたいという考えはありますか。1つだけマークしてください。

- ある
- ない
- どちらともいえない

Q13. Q12 についてそのように考える理由を教えてください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- いずれ飛騨地域にはない職種の仕事に就きたいため。
- 家族から離れて生活したいため。
- 飛騨地域から離れて生活したいため。
- 飛騨地域以外の場所で何らかの経験を積むことは、この場所で生活しているうえでも必要だと考えるため。
- その他（自由解答欄）

Q14. 以下の5つの選択肢の中で当てはまるものをすべて選んでください。1行につき、「強くそう思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」、「わからない・関係がない」から、1つだけマークしてください。

- 地域を出る必要が無ければ、この地域に住み続けたい
- 自分は地域社会の一員だ
- この土地は無くてはならない場所だ
- 地域の人々は大切な存在だ
- この土地は住みよい場所だ

現在の学年を教えてください。

- 高校1年
- 高校2年

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- 高校3年

1年生へ

Q15. 2年生になると、1年間を通じて、飛騨についてテーマを設定して探究する「探究飛騨」という授業があります。この授業について知ったのはいつですか。1つだけマークしてください。

- 今
- 入学してから知った
- 入学する前から知っていた
- わからない

Q16. Q15について、どのように知ったか教えてください。(選択肢にないものは記述をお願いします。)1つだけマークしてください。

- 今この選択肢を見て知った
- 入学後に教員や友人から聞いた
- 入学後に家族から聞いた
- 入学前に学校の広報から聞いた・学校のHP等で見た
- 入学前に中学の教員から聞いた
- 入学前に家族から聞いた
- その他（自由解答欄）

Q17. 探究飛騨について、楽しみだと感じている点を下記から選んでください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 飛騨について詳しく知ることができる
- 文献調査やアンケート・インタビューなど、研究手法を学ぶことができる
- パソコンの操作を学ぶことができる

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- 発表をする経験ができる
- 友人との仲が深まる
- 大学生と関わることができる
- 自分の調べたいことを解決できる機会になる
- 大学受験等、進学に役立つ可能性がある
- 勉強の息抜きになる
- 市議会議員の方など地域の方に、自分の考えを提案できる
- 特になし
- その他（自由解答欄）

Q18. 探究飛驒について、不安だと感じている点を下記から選んでください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 探究活動が思い通りに進められるかどうか
- 大学生と上手くかかわれるかどうか
- このような探究学習が受験(進学)に役立つのかどうか
- 部活動に制限が出るのではないか
- 特になし
- その他（自由解答欄）

2年生へ

Q15. 現在皆さんが行っている「探究飛驒」の授業について知ったのはいつですか。1つだけマークしてください。

- 今年の2月(初めて探究飛驒の授業が行われた時)
- 入学してから知った
- 入学する前から知っていた

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- わからない

Q16. Q15 の経緯についてももう少し詳しく教えてください。(選択肢にないものは記述をお願いします。)1 つだけマークしてください。

- 授業が始まる際に知った
- 入学後に教員や友人から聞いた
- 入学後に家族から聞いた
- 入学前に学校の広報から聞いた・学校の HP 等を見た
- 入学前に中学の教員から聞いた
- 入学前に家族から聞いた
- その他（自由解答欄）

Q17. 探究飛騨について、楽しいと感じている点を下記から選んでください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 飛騨について詳しく知ることができる
- 文献調査やアンケート・インタビューなど、研究手法を学ぶことができる
- パソコンの操作を学ぶことができる
- 発表をする経験ができる
- 友人との仲が深まる
- 大学生と関わることができる
- 自分の調べたいことを解決できる機会になる
- 大学受験等、進学に役立つ可能性がある
- 勉強の息抜きになる
- 市議会議員の方など地域の方に、自分の考えを提案できる
- 特になし
- その他（自由解答欄）

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

Q18. 今後の探究飛騨について、不安に感じている点を下記から選んでください。(当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。)

- 探究活動が思い通りに進められるかどうか
- 大学生と上手くかかわれるかどうか
- このような探究学習が受験(進学)に役立つのかどうか
- 部活動に制限が出るのではないか
- 特になし
- その他（自由解答欄）

Q19. この授業によって、飛騨地域への愛着が深まっていると感じますか。1つだけマークしてください。*

- 感じる
- 感じない
- わからない・どちらともいえない

3年生へ

Q15. 昨年度皆さんが行った「探究飛騨」の授業について知ったのはいつですか。

- 昨年の2月(初めて探究飛騨の授業が行われた時)
- 入学してから知った
- 入学する前から知っていた
- わからない

Q16. Q15 の経緯についてももう少し詳しく教えてください。(選択肢にないものは記述をお願いします。)1つだけマークしてください。

- 授業が始まる際に知った
- 入学後に教員や友人から聞いた

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- 入学後に家族から聞いた
- 入学前に学校の広報から聞いた・学校の HP 等を見た
- 入学前に中学の教員から聞いた
- 入学前に家族から聞いた
- その他（自由解答欄）

Q17. 探究飛驒について、「楽しかった」、「ためになった」など、肯定的に感じている点を下記から選んでください。（当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。）

- 飛驒について詳しく知ることができた
- 文献調査やアンケート・インタビューなど、研究手法を学ぶことができた
- パソコンの操作を学ぶことができた
- 発表をする経験ができた
- 友人との仲が深まった
- 大学生と関わることができた
- 自分の調べたいことを解決できる機会になった
- 大学受験等、進学に役立つ可能性がある
- 勉強の息抜きになった
- 市議会議員の方など地域の方に、自分の考えを提案できた
- 特になし
- その他（自由解答欄）

Q18. 探究飛驒について、否定的に感じている点を下記から選んでください。（当てはまるものを全て選んでください。また、選択肢にないものは記述をお願いします。）

- 探究活動が思い通りに進められなかった
- 大学生と上手くかかわることができなかった

地域を題材とした探究学習が生徒の地域への愛着に与える影響（日下部結人）

- この授業によって受験(進学)の妨げとなった(またはなる可能性があると感じた)
- 部活動に制限が出た
- 特になし
- その他（自由解答欄）

Q19. この授業によって、飛騨地域への愛着が深まったと感じますか。1つだけマークしてください。

- 感じた
- 感じない
- わからない・どちらともいえない

本文 35 字×25 行×71 ページ、全 38881 文字